

19～20世紀前半のオルドスにおける外来文化要素の 受容過程に関する一考察

——“二人のセチェンの祭祀”を事例に——

井 上 治

1. はじめに
2. 『智慧の灯火と呼ばれる宝の綱要』(BJ)の文献学的研究
3. 七世パンチェンの儀軌書の受容とその変容の過程
4. おわりに

1. はじめに

本稿は、中国内モンゴル自治区オルドス市ウーシン旗に現存する“二人のセチェンの祭祀”（“サガン＝セチェンの祭祀”とも呼ばれる場合がある）が経験した19～20世紀前半における外来文化受容の過程に関する新出史料に対して、内容分析を主とした文献学的考察をおこない、この文献のもつ特徴と性格を明らかにする。つづいて、この新出史料とこれに関連する史料に記された、1811年から翌年にかけてチベット巡礼にでた王侯が、チベットで得た護法神供養儀軌書を受容しウーシンに将来した過程と、その儀軌書のウーシンにおける受容の経過を、文化触変の過程として捉えることと、文化触変が生み出す文化の多様化の結果として、この“二人のセチェンの祭祀”を位置付けることを試みる。

(1) モンゴルにおける外来文化要素受容の事例探究

モンゴル人の特徴ある風俗習慣のひとつに、チンギス＝ハーンに代表される、過去の実在の人物に対しておこなう祭祀がある。とくに、現在の中国内モンゴル自治区オルドス市（旧イェヘ＝ジョー盟）のエジェン＝ホローでおこなわれているチンギスの祭祀はよく知られている。祭祀の対象がチンギスというモンゴルを代表する偉人であることも手伝って、数多くの研究がなされている。

史料を遡及すると、現在のチンギス祭祀のように組織化・制度化されたモンゴルの祖先（偉人）崇拜は、元のフビライの時に確認できるが、現在の祭式は『元史』『祭祀志』に見える手順とは明らかに異なっている。しかし、現在のチンギス祭祀の祭式の変遷を跡づけ

るに十分な史料は、管見の限りでは存在しないので、『元史』所載の祭祀が現在のチンギス祭祀式の直接の祖型であるとは断言できない。現在のチンギス祭祀の祭祀がどのようにして定められたかを知ることも困難である。

少なくとも現今のチンギス祭祀の一隅にラマが参加し何らかの経文を唱えていることや、一部の祭文に仏教的な要素や影響が確認されることから、インドに発祥し中央アジアやチベットを經由してモンゴル人のもとに到達した仏教が、モンゴル人の祖先(偉人)崇拝にある程度の影響を与え、それが今日まで伝わっていることは動かし難い。このような仏教的要素を若干なりとも含んだモンゴル人の祖先(偉人)崇拝は、モンゴル人の伝統的信仰体系あるいは風俗習慣に、仏教の要素が加わったという点で、モンゴルにおける外来文化受容の実例として見ることができる。

しかし、仏教がモンゴル人居住域に到達し、これをモンゴル人が受容した最初の時期を正確に定めることは困難である。『元史』に見えるチンギスを含む祖先祭祀が、同じく『元史』に確認できる数々の仏教儀礼と没交渉でなかったことは明らかになっているが、それはある一時点の状態であって、起源を捉えて過程を一貫して明らかにしたものではない。起源に拘泥しこれを追求することは、当然ながら限界がある。

そこで、仏教化の如何や起源にはこだわることなく、ある時期の祖先(偉人)崇拝のありようを捉えて、その外来文化の影響による変容や外来文化の要素の到来過程のいずれかに取り組むことのできる事例を探究した。結果、筆者がここ数年研究を続けている、ホトクタイ=セチェン=ホンタイジとその曾孫のサガン=エルヘ=セチェン=ホンタイジという人物への祭祀に着目することとした。この祭祀は、中国内モンゴル自治区オールドス市ウーシン旗(清代のオールドス右翼前旗)でおこなわれている。

(2) “二人のセチェン”とその祭祀

ホトクタイ=セチェン=ホンタイジは、16世紀後半のオールドスのウーシン地方に登場した王侯であり、現在の内モンゴル自治区の区都であるフヘホト市を中心に大勢力を誇ったトゥメド部の首領であった大叔父のアルタンとともに活躍した。その活躍の最たるものと筆者が評価するのは、ホトクタイ=セチェン=ホンタイジが属するオールドス部の首領を主たる勢力としておこなわれた新疆や青海地方への遠征活動の一環として、仏教への帰依を深めるアルタンとチベット仏教ゲルク派の高僧三世ダライラマ・ソナムギャンツォを青海地方のチャブチャールというところで会見させたことである。この出来事は、モンゴル人の遠征活動の一つとしてよりも、その後のモンゴルにおける爆発的仏教信仰の広まりのきっかけとして評価されることが多い。この評価が示すように、ホトクタイ=セチェン=ホンタイジとは、今日も衰えることなくモンゴル人が信仰する仏教の拡大に大きな役割を果たした人物である¹。

ホトクタイ=セチェン=ホンタイジのもう一つの事績としてあげておかなければならな

な紹介と重要な祭文のテキストが公刊されている。しかし、その研究が発展するのは、1950年代、とりわけ80年代以降に、やや詳しい祭祀の様子を紹介と重要な関連文献のテキストの公刊が、オルドス地方の研究者によって進められて以降のことである。中でも目立つのは、“ホトクタイとサガンの二人のセチェンの祭祀”の初のモノグラフであるチルマイルトらの研究⁶と“ホトクタイとサガンの二人のセチェンの祭祀”に関する最大の研究書であるラグシャンプリンの研究⁷である。以下、戦前から近年までの優れた研究を取り上げて紹介する。

1) モスタールトの先駆的業績：祭祀の紹介と祭文テキスト研究

筆者の知る限りでは、このホトクタイ＝セチェン＝ホンタイジ（以下ホトクタイと略す）とその曾孫サガン＝セチェン＝ホンタイジ（以下サガンと略す）を合わせ祀る儀礼についてはじめて報じたのは、戦前オルドスに滞在したスクート修道会（Scheut Missions-CICM Missionaries, 淳心会）のモスタールト（Antoine Mostaert）であった。モスタールトは1934年に、ホトクタイとサガンの合祀の事実とその場所ならびに時期、祭祀の場で読まれるひとつの祭文『祈願の奏上（*dayadqal-un öčig*）』⁸のテキストをローマナイズのうエフランス語に訳した⁹。

この文章は5ページにも満たないものであるが、モスタールトがオルドスに滞在していた当時、ホトクタイがサガンとともにその後裔たちによって祀られているというあまり知られていない事実を知らせる目的で書かれた。モスタールトは、『エルデニ＝イン＝トブチ』（以下ETと略す）によって、ホトクタイが住んだのが、シャラ＝ウス河（*sir_a usu youl* [ソハイ河 *suqai youl*、紅柳河、爛泥河とも称される])の右岸、ウーシン旗南部のマング＝ボラグ（*mangruy bulay*）という泉の近くに位置するイエヘ＝シベル（*yeke siber*）という所であり、その当時にも同じ名前で行われていることを述べる。ついで、ホトクタイの埋葬場所について、当地の伝説がそろって、ある丘に埋葬されたことと述べていることを挙げ、その丘とは、陝西省靖辺県の寧条梁から包頭に通じる道路の西にあって、イエヘ＝シベルから西北に8～10里、シャルリグ寺（*šarliq-un süm_e*）からそう遠くはないところに位置していることや、この丘はイエヘ＝オンゴン（*yeke ongyun*）と呼ばれて耕作も狩猟も禁じられているところであること、モスタールト自身が1910年の夏にここを訪問したが、煉瓦造りの建築物の遺跡があるのみだったと伝える。また、モスタールトは、ウーシン旗南部のタイジ（王侯貴族）らの系譜を調査し、彼らはみなホトクタイの二男の後裔にあたる者たちで彼らこそがホトクタイの祭祀にかかわっていること、陰暦の4月17日に祭祀をおこなうこと、この日に付近のタイジたちがイエヘ＝オンゴンに集って火を焚き羊を屠りアルチャ（*arča*）という植物を捧げること、参列者はこの文章でモスタールトが紹介している祭文を唱えること、モスタールトがこの祭文の原本をホトクタイの後裔に当たるワンチュグラブダン＝タイジ（*Vangčuyrabdan tayiji*）から1916年頃に贈られたこと、ワンチュ

グラブダン＝タイジは毎年この祭祀に参加していること、などを紹介している。そして、その祭文『祈願の奏上』のローマ字転写テキストとフランス語訳を載せた。このように、モスタールトの紹介はごく簡単なものではあるが、ホトクタイの後裔がその祭祀を執行していること、その場所と時期、重要な一つの祭文をはじめて学界に知らせた功績は大きい。

戦後になってモスタールトは、サガンならびにホトクタイ“二人のセチェン”の祭祀に関する詳しい情報と1934年の文章で紹介しなかった二つの祭文『サガン＝エルヘ＝セチン＝ホンの経 (*sayang erke sečin qung-un sudur*)』と『オンゴンの献香儀礼 (*ongyun-u sang tayily_a orusiba*)』のローマ字転写テキストとフランス語訳、解題を付して1957年に発表した¹⁰。この論文でモスタールトが明らかにしたことは、ほぼ次のようにまとめることができる。

この祭祀は、主にその後裔に当たるウーシン旗のタイジによって行われている。祭祀は、彼らの墓所に公式に年ごとに捧げられる犠牲と、個別に祈られる祈りからなる。公式の犠牲はジュム (*jumu*) と呼ばれる役人が司どり、“ウチュク”¹¹ と呼ばれる犠牲の祈りを朗誦する。サガンが埋葬された場所は、ウーシン旗のイエヘ＝ボドン (*yeke bodong*) というところのそば、ササ＝イン＝シリ (*sasa-yin sili*) と呼ばれる丘のすぐ近くにある。墓のすぐ近くは狩りと開墾が禁じられている。墓所の番人は、テーガムあるいはテーガン (*tai-yam*) と言う。ウーシンの王侯が犠牲を捧げ“ウチュク”を朗誦するのは、毎年旧暦12月29日である。さらに、サガンとその祖先が住んだイエヘ＝シベル草原に隣接しているバガ＝シベル (*baya siber*) 草原で、毎年旧暦5月16日に、モンゴル人が「エルヘ＝セチェン＝ホントイジ¹²のスルデ (*sülde*)」と呼ぶ、サガンの魂の宿る軍旗で「守護神」となったものを記念して、犠牲を捧げ“ウチュク”を朗誦する祭りがおこなわれる。ホトクタイはイエヘ＝オンゴンと言う丘に埋葬されている。この丘はウーシン地域の南部に位置している。イエヘ＝シベル草原の北西8～10里の距離にある。シャルリグ寺 (*šarliy-un süm_e*)、公式名を *γayiqamsiytai egüle-tü süm_e* (驚嘆すべき雲の寺)、漢語では瑞雲寺という名を持つ寺院から遠くない。ここもまた禁猟禁耕区である。毎年旧暦4月17日にウーシンのタイジがそこで、“ウチュク”を朗誦して犠牲を捧げる。サガンの最期には悲劇的な伝説があり、彼は清への服属を拒んだが、清をおそれた息子に裏切られて、清の皇帝の命によって処刑されたという。また、ホトクタイもサガンも、その転生の出現を阻もうとするチベットのラマの策謀により、埋葬した亡骸が掘り返され経文でくるまれたために、事実彼らは転生しなかったという伝説もある。ホトクタイは、三世グライラマ・ソナムギャンツォより、古代インドのマガダ国王ビムビサーラの転生であることを意味する称号¹³を与えられたが、当地の伝説では、チベットの富の神である黄ジャムバラの転生ともみなされ、祈りの中でさまざまな加護を求められる。サガンとその祖先に捧げられる祭祀の特徴は、その墓所の前で毎年捧げられる荘厳な供犠の時の“ウチュク”や奉納物を捧げる時に唱える祈りにおいて、ひとしくホトクタイの名前がサガンの名前に先行して読み上げられることにある。

もう一つの特徴は、その祭祀がチングスの祭祀と結合されているということである。実際、彼らを称えて公衆の前で朗詠される祈りでは、チングスの名は、常に彼らに先立っており、ホタクタイとサガンの祭祀はチングスを称える祭祀の延長と補充のように表現される。また、チングスを称える祈りと供犠において、ホタクタイとサガンが同じ役割を持つと言うことがある。実際、『チングス＝ハーンの奏上と供物を捧げる行いを迅速に為すもの (*činggis qaγan-u öcüg takil üiledküi üiles türgen-e bütüyči kemegdekü orusibai*)』という儀軌書では、チングスはホタクタイとサガンを眷属として従えている。この二人は、中心に位置するチングスを囲んで立っているように描写され、三人すべてチベット仏教の神を想起させる特徴および特性をもっているように記述されている。さらに祭文には、チベット仏教の神が登場し、供犠の場所への到来と奉納物の一部を受け取るよう呼びかけられてもいる。

以上がモスタートルトが紹介する“ホトクタイとサガンの二人のセチェンの祭祀”の概要である。モスタートルトは続いて、この論文に採った二つの祭祀関連文献を紹介し、いくつかの考察をおこなっている。モスタートルトがこの論文において紹介する二つの祭文は、1936年にホトクタイの二男の後裔に当たるトブチンドルジ＝タイジ (*Tobčindorji tayiji*) より贈られたものである。はじめに紹介するのは、『サガン＝エルヘ＝セチン＝ホンの経』という。これは、モスタートルトが前著で紹介したホトクタイの墳墓の前で毎年暗唱される“ウチュク”と多く類似点をもつ祈りを含んでおり、旧暦12月29日にサガンの墳墓に向けて読まれる祈りでもあり、その守護神軍旗 (*sülde*) に向けて旧暦4月16日に読まれる“ウチュク”でもある。コロフォンでは、これがロブジャンチョイラグ (*Lubjangčoyirag* < tib. *bLo-bzang chos-brag*) というラマが、バルジュル (*Baljur*) という貴族の求めに応じて書いたとある。このロブジャンチョイラグは、1835年に『真珠の数珠 (*subud erike*)』という年代記の著述にあたり著者を助けたラマに他ならない。モスタートルトは、バルジュルがロブジャンチョイラグにこの『サガン＝エルヘ＝セチン＝ホンの経』を著すよう求めた理由として、この祭祀はすでに長いこと存在したが、祭文自体の語彙およびスタイルが廃れ、もはや彼の時代の文学的知識が許容できなくなったため、その代わりとして新しいものを作らせたのだろうと見ている。もう一つの写本は『オンゴンの献香儀礼』という。これをモスタートルトが前著で紹介したホトクタイの墓所における毎年の供犠の時に朗誦する“ウチュク”と比較すれば、『オンゴンの献香儀礼』が大衆的バージョンであり、“ウチュク”のテキストが祭祀の公式バージョンであることは明白であるという。実際、『オンゴンの献香儀礼』がホトクタイに帰する驚異的な行動が“ウチュク”には見えない。“ウチュク”には、ホトクタイの妻に関する言及、およびホトクタイがソナムギャンツォに与えられた古代インドのマガダ国王を意味するスクチェンニンポ (< tib. *gzugs can snying po*) 号に関する言及がまったくない。これに対し『オンゴンの献香儀礼』では、ホトクタイの妻セチェン＝ハトン (*Sečen qatun*) は夫のすぐあとに記されている。彼女は、今なおオールドス

の口碑に登場し、天女 (dakini) の化身であると言われる。ホトクタイは、セチェン=ノヤン (Sečen noyan) という人々によく知られた名でしか記されておらず、富の神の化身とされている。公式バージョンの“ウチュク”と『オンゴンの献香儀礼』の間には、この他にも、『オンゴンの献香儀礼』ではセチェン=ノヤン¹⁴の子孫と「隷属民」双方への恩恵を要求しているのに対し、公式の“ウチュク”では、ホトクタイの「隷属民」は登場しないことや、ホトクタイ自身に奉納をおこなう「隷属民」に向けられたテキストであるという違いがある。これとは反対に、『オンゴンの献香儀礼』はサガンに言及していないことにも注意すべきである。この事実において、このテキスト（より正確には、その最初のテキスト）が、サガンの祭祀がまだ実施されていなかった時期に遡ることを証しているのかもしれない。さらにこのテキストは公式の“ウチュク”よりも古風であることも挙げられる。表現から見ても『オンゴンの献香儀礼』はさほど近代化されたようにはみえない。しかしモスタールトは、どのような人々がどのような事情において『オンゴンの献香儀礼』を朗誦するかわからない、と述べている。

2) 重要テキストの紹介と研究

モスタールトの先駆的業績に続いて、1980年代からは、重要な祭文類のテキストのいくつかが相次いで発表されるようになった。

その第一は、モスタールトが言及した儀軌書『チンギス=ハーンの奏上と供物を捧げる行いを迅速に為すものというもの』である。これは、モスタールトがオルドスで収集した文献類を積極的に研究したセルイス (Henry Serruys) によって1985年にテキストのローマ字転写に英訳注を付して刊行された¹⁵。これとは別に、内モンゴルのフレルバートル (Kürelbayatur) がイタリアのモンゴル研究者キオド (Elisabetta Chiodo) より提供されたコピーとセルイスのローマ字転写テキストを対照したモンゴル文字による校訂テキストを発表した¹⁶。学術的観点からすれば、関連の情報を含む導入と訳注を備えたセルイスの業績のほうが優れている。

この儀軌書は、モスタールトも明らかにしているように、中心に赤面憤怒形のチンギスを配し、その周囲にホトクタイとサガンが眷属として従っている様子を文字で描写し、この描写に対して供儀や奉納を如何におこなうかを記したものである。

セルイスは、テキストを一読すればわかることではあるが、この儀軌書には完全にチベットの考え方と表現が浸透していることを特徴としてあげている。また、ネベスキー=ヴォイコヴィツ (Nebesky-Wojkowitz, René de) が、青海地方のモンゴル人とチベット人に崇拜されている神々の中にチンギスが含まれていることと、そのテキストの一部をチベット語のテキスト *yul lha gzhi bdag sogs kyi mchod 'phrin gyi rim pa rnams phyogs gcig tu bsdebs pa* から引用していることを知らせている。セルイスは、このチベット語テキストがオルドス出自のテキストを翻訳したものかあるいは受容したもののみならず一方で、注の

中でチベット語テキストの方がオリジナルであるという考え方に傾斜しつつあることを述べている。

第二の重要なテキストは、『ササ祭祀の経 (*sasa tayily_a-yin sudur*)』である。これは1985年にオルドスのチョイダル (Čoyidar) が、もとの写本を(自身で?) 書写したものを出版に供し、モンゴル文字活字にして公刊されたものようである¹⁷。もとの写本には清の光緒32(1906)年の紀年があり、写本そのものは清末のものであるが、チョイダルが公刊した活字テキストの末尾には、民国31(1942)年11月16日に書き終えた旨が記されている。『ササ祭祀の経』のテキストは、1995年にオルドスのプリンジルガル (Bürinǰiryal, Farqatan) によって活字に直され注釈を加えて再び公刊された¹⁸。セチェンとサガンの生涯の略述と三箇所でおこなわれる“二人のセチェンの祭祀”の概要も付されている。このプリンジルガルのテキストには、チョイダル提供のテキストに記されている、民国31(1942)年11月16日に書き終えた旨が見えない。両者とも写本に関する情報を一切明らかにしていないため、これらテキストの相互関係は明らかにし得ない状況にある。

1990年代に公刊された重要祭文類のテキストの紹介と研究の主たるものは以上であるが、ラグシャンプリンの研究書には上で紹介したテキストのほとんどだけでなく、従来知られなかった多数の祭文類のテキストを紹介し初歩的な研究をおこなっている。このことも含め、ラグシャンプリンの研究については下でまとめて述べる。

3) 祭祀の状況に関する紹介と研究

1990年代に入り、オルドス地方の研究者らによって、“二人のセチェンの祭祀”の状況がやや詳しく紹介されるようになった。上に記したように、この中では、“二人のセチェンの祭祀”の初のモノグラフであるチルマイトらの研究に言及すべきであるが、“二人のセチェンの祭祀”に関する最大の研究であるラグシャンプリンの著書が出た今は、研究にとっての重要性が薄くなったので、刊行の事実だけをここに述べるにとどめる。

筆者が集めた資料の中では、モスタートルトに続いて、上に紹介したプリンジルガルが、三箇所でおこなわれる“二人のセチェンの祭祀”の概要を手際よく紹介しているので¹⁹、これに基づいて祭祀の概要を示しておく。

①ダルハンラマ寺 (*darqan lama-yin süm_e*) : ウーシン旗トク=ソムのダルハンラマ=ガチャーにある仏教寺院。本尊はセチェンの塑像で、彼の玉印や剣なども祀っていた。順治6年から雍正9年の間にアル=イン=ホイ (*aru-yin qoi*) とウルゲ=イン=ホイ (*ölge-yin qoi*) という小さな廟を合わせて建立された寺院であるが、元来はサガンが建立した寺であり、ウーシン旗の“内ハリヤー (*dotur_a-yin qariy_a*)”²⁰の地方的寺院であったので、この寺は内ハリヤーが管理し祭祀のすべてを遂行している。寺院では、サガンの甲冑と弓袋などをも祀っていた。祭文はすべてモンゴル語で読む。まずサガンの家譜を読み上げる。祭式は他のウーシン旗内とは異なっている。祭祀にはウーシン旗長や貴族、官僚とサガン

の後裔が一緒に参加して祀るものの経は唱えず、聖俗そろって寺院内で酒宴を催し音楽と歌で盛り上がるものであった。寺には確かに数多くの仏典があるが、これは主たる信仰の対象ではない。この寺にはマンバ＝ラサン（薬学部）があった。ダルハンラマ寺のオボーは旗が管理し公文書を出して祭祀のすべての用度を準備する。このようなオボーは旗内には他にない。寺の北方、半日の距離にあるバガ＝ノールはウーシン旗の東北部にあたるが、ここに旗の役所がある。ホトクタイが生まれて死んだ所はウーシン旗の西南に位置しているが、旗の役所からかなり遠くて不便なため、ホトクタイを祀る寺であるダルハンラマ寺を旗の役所の近くに建立したのである。

②普く集まった完全な安寧もつ宝殿（*qotala čiyuluγsan tegüs amuγulang-tu erdeni-yin qarsi*）：ここはホトクタイとサガンのオンゴンとスルデの祭祀をおこなう寺である。イエヘ＝ボドン草原の西北に位置するイエヘ＝オンゴン草原にホントイジ²¹が生前に建立した。これは、シラオスン河南岸のイエヘ＝シベル草原から500～600里の距離にある。この地は現在は陝西省神木県イエヘ＝ボドン郷内に位置している。ここはもとはウーシン旗の地であった。なぜシラオスン河南岸イエヘ＝シベル草原からイエヘ＝ボドンの地に移ったのかというと、第二代ウーシン旗長ダルジャ（*Darja*）が康熙14（1674）年に陝西から寧夏の長城近辺の地で反乱軍を鎮圧する軍功を立て、長城内外に住んでいたウーシン旗のガルハタン＝ハリヤーの民が東北に移動し、イエヘ＝ボドンが位置する神木県北部一帯に居住するようになり、それまで祀り信仰してきたオンゴンやスルデ、オボーや土地の神を祀る物までもそこに移したからである。

③バンチャン寺（*bančan süm_e*）：モンゴル風のチベット語表記はボンスクガダンチョイリン（*bungsuγgadančoyiling*）²²という。モンゴル語に訳せば、普く集まった喜びを全く具えた法の洲（*qotala čiyuluγsan bayar tegüs nom-un tib*）。この寺は、サガン家の菩提寺である。この寺にある信仰の対象や祭祀については『ササ祭祀の経』に仔細かつ明らかに語られている。また、ホトクタイとサガンの図像を祀っている。バンチャン寺と、ホトクタイとサガンのオンゴンとスルデを祀る寺は相互に密接な関係がある。「普く集まった精美な安寧もつ宝殿（*qotala čiyuluγsan tangsuγ*²³ *amuγulang-tu erdeni-yin qarsi*）」での祭祀は、まずはじめにラマたちが施餓鬼を準備し終わった後、タイガン（モスタールトのいうテীগムあるいはテীগン）たちが羊の丸煮と清浄な乳製品を捧げて、皆が手をつないで礼拝して供物を捧げて戻り、白いフェルトの敷物の上で三度跪き九度礼拝する。ラマたちが「ガンス（*gangsū*）」²⁴を読み終えると、旗長から順に、みやまぬかばの仕事人²⁵、聖俗がみな集まって、良き香りの五つの供物であるお香、灯火、食べ物、花、香りを捧げ、ラマたちが真言を唱えはじめたら、貴族らから順に五色のハダグを捧げ、仕事、奏上、祈願を申し上げる。また、男の三種の競技²⁶をおこない表彰する。そのあと、一般人が祭祀の手順に従って祀り祈願する。ガルハタン＝ハリヤーの貴族・一般人以外の他のハリヤーの人と他旗のモンゴル人も自ら各自の信心に応じて祀る。また、シラオスン河南岸のタイジたちが

毎年陰暦4月17日に供物を捧げ奏上・祈願をおこなう。シラオスン河南岸のタイジたちはホトクタイの二男の子孫であるが、シラオスン河南岸にはオンゴン、スルデの祀所として建てたものがほとんどないのである。

4) ラグシャンブリンによる集大成

ウーシン旗の医師であり、サガンの祭祀の実行と維持、発展の功労者であるラグシャンブリンが、サガン生誕400周年にあわせ、これまでの関連する先行研究をまとめ、自ら調査・見聞したことや、収集した資料を一挙にまとめた『サガン＝セチェンの祭祀』を2004年に刊行した²⁷。筆者は翌年に書評を発表し、その内容を紹介した²⁸。本稿でこの大著の内容を簡単にまとめることは困難であるので、ラグシャンブリンの研究の特筆すべき点を以下に示すにとどめたい。

- ①ホトクタイやサガン、彼らの後裔、ホトクタイとサガンの祭祀に携わったラマや地元の人々の事績を細かに挙げている。賛否が分かれるところではあるが、これらの人々に関して地元で言い伝えられている伝説の類も積極的に取り入れている。
- ②しばらくの間途絶えていた祭祀の復活に尽力したラグシャンブリン自らの活動の中から獲得した情報や丹念に書き留めておいた記録を掲載している。
- ③これまで知られていなかった祭文類を多数採録し、その一部を巻末に影印した。
- ④いくつかの場所でおこなわれるホトクタイとサガンの祭祀の変遷と現況、祭祀の手順などを詳細に示している。

ラグシャンブリンの研究には、記述が論理的ではないためにやや読みにくい点があることや、採録・収集した祭文類の出典・所蔵などの書誌的情報を十分に明らかにしていないなど、改善を要する部分がある。しかしながら、ラグシャンブリンが、これまで知られていなかった数多くの歴史的事実を明らかにし、数多くの祭文類のテキストを公刊したことの功績は大変に大きく、本稿のもとになった研究もこれに大いに助けられた。

なお、上に示した以外にも、オールドスの研究者が関連する研究や紹介を発表しているが、ここでは一々紹介せず、注に掲げるにとどめておく²⁹。

5) ホルチャビリグによる新研究

“二人のセチェンの祭祀”における外来文化要素の受容を歴史的に捉えようとするとき、この祭祀に大きな影響を与えたのは明らかにチベット仏教あるいはそれに由来する文献群であり、それはトトイ(Totui)という人物のチベット巡礼を契機としていることが、とくにオールドスの研究者の論著に累々述べられてきた。しかし、そのことを記す史料や根拠が明らかにされてこなかったため、歴史学的に納得のいく形で研究されることはなかった。

そのような状況下、トトイの巡礼について記すきわめて注目すべき史料『智慧の灯火と言われる宝の綱要 (*bilig-ün jula kemegdekü erdeni-yin tobčiy_a*. 以下 BJ と略す)』³⁰が、

2004年6月にウーシン旗で開催されたサガン＝セチェン生誕400周年記念の学会で、内モンゴル社会科学院のホルチャビリグ (Qurčabilig) によって紹介された。この紹介はほぼそのまま論文「サガン＝セチェン研究に関連した若干の誤解を明らかにする」³¹として刊行された。

ホルチャビリグは、コロフォンによって、著者がヴァンチンノルブ (Vančingnorbu)、著年が1836年であることを明らかにした。ヴァンチンノルブがどこの誰かは今もって明らかでないが、ウーシン旗の仏教徒であろうと述べている。そして、この資料は、①これまで伝えられてきたものとは異なるサガンの後裔の系譜が見えている、②サガンが後半生、仏教徒としての行いに精力的に取り組んでいたこと、③サガンの後裔として著名なメルゲン＝アハイ (Mergen aqai) はトトイの称号であって、別の人物ではないこと、④サガンの祭祀の書物『チンギス＝ハーンの奏上と供物を捧げる行いを迅速に為すものというもの』は、1812年にチベット巡礼に出たトトイが、ラシルンブ (rasilhünbū < tib. bkra shis lhun po [タシルンポ]) で七世パンチェン・ロブサンバルダグナムビニマ (Lubsangbaldandambinim_a < tib. bLo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma [ロサンペンデンテンペーニマ]) に書かせたものであることを明記していること、これらの点で価値の高い文献であるとする。

その後ホルチャビリグは研究を進め、2005年の中国国内の学会において「チンギス＝ハーン尊い三人の眷属の祭祀の始末」³²を発表した。主な論点は、1812年にトトイが七世パンチェンに書かせたサガンの祭祀の書物は、オルドスに存在したチンギス、ホトクタイ、サガンの祭祀を結合させた“チンギス＝ハーン尊い三人の眷属の祭祀”³³の成立を意味すること、七世パンチェンの書いたサガンの祭祀の書物、すなわち儀軌書はチベット語で書かれていたので、これが即座に翻訳され、『チンギス＝ハーンの現観論、招請、供犠、懺悔礼拝、賞賛、祈願などを揃え含めた堅い武器というもの (činggis qayan-u bütügel-ün onul jalaly_a qangyal namancilal maytayal šayardaly_a Jerge-yi bürin baytayaysan batu Jebseg kemegči orusiba)』、あるいは、『チンギス＝ハーンの奏上と供物を捧げる行いを迅速に為すものというもの』という名で現在も伝わっていること、光緒32 (1906)年に再編集されたサガンの祭祀の次第を記した重要な文献『ササ祭祀の経』では、それまでのチンギス、ホトクタイ、サガンの三人の祭祀をやめて、主にホトクタイとサガンを祀る祭祀に変更されていることから、七世パンチェンが作った「三人の祭祀」が、元来の「二人の祭祀」に戻ったこと、これらを主張した。

これらホルチャビリグの研究は、いつの時点で成立したか不明ではあるが従来からあったホトクタイやサガンの祭祀が、1812年に七世パンチェンの儀軌書によってチンギスとの合祀の形をもってチベット仏教的に整えられ、それが1906年に再びホトクタイとサガンの祭祀に復帰したという現在の“ホトクタイとサガンの二人のセチェンの祭祀”に至る変遷の過程を示したことや、七世パンチェン作の儀軌書将来の経過を示す BJ という文献、七世パンチェン作の儀軌書とそのモンゴル語訳、七世パンチェン作儀軌書からの脱却を規定

した『ササ祭祀の経』という文献の存在を主張した点が注目に値する。

(4) 本稿の目的

冒頭に示した、本稿の目的をもう少し詳しく述べておきたい。

筆者は、上のホルチャビリグの研究に触れ、この研究課題において、自ら BJ をはじめとする関連史料を入手してテキストを分析することと、そしてできるならば、ウーシン旗や隣接した地域に現地調査をおこなうことを目指した。

結果から言えば、時間的制約で現地調査³⁴を十分におこなえず、祭祀がおこなわれる全地点を自らの足で踏めなかった。また、ホルチャビリグが使用した『チンギス=ハーンの現観論、招請、供犠、懺悔礼拝、賞賛、祈願などを揃え含めた堅い武器というもの』という七世パンチェン作の儀軌書のモンゴル語訳が所蔵されているはずの機関で行方不明になってしまったことが影響して、“二人の祭祀”の全体像を把握するまでには至らなかった。

そこで、この研究課題では、新出史料 BJ に対する文献学的研究と、モンゴル人の祖先(偉人)崇拝にチベットの要素が如何に持ち込まれるか、その過程や動機を明らかにし、外来文化の要素の受容に働く力学の一端を示すことに絞ることとした。

ホルチャビリグの研究がまだ十分に踏み込んでいないこととして、BJ そのものに対する文献学的考察が十分でない点が挙げられる。下の2 (1)で紹介するように、BJ 成立の背景には、これとほぼ同時期に成立したいくつかの文献との密接な引用関係があることをホルチャビリグ自身述べている。しかし、その関係が何を意味しているかに注意を払わなかったため、BJ の内容構成から見られる、当時のオルドスにおける伝統的歴史記述の伝記としての再編という興味深い事実が浮き彫りになっていない。

またホルチャビリグは、七世パンチェンが編んだ儀軌書のモンゴル語訳には着目しているが、そのチベット語原典との比較をおこなっておらず、原典と翻訳の間に違いがあるか、あるとすればどの点にあるかが明らかになっていない。筆者自身もこの点の追求はまだまだ不十分であるが、モンゴル人自身が祖先(偉人)祭祀の現場でチベット語原典をどのように運用していたかなどを、BJ の記録と合わせて可能なかぎり明らかにしたい。

また、ホルチャビリグの研究の主たる目的は、オルドス地域の歴史研究で見逃された事柄を BJ の記述によって補うことにあるのに対し、筆者の目的は、モンゴルに異文化の要素が持ち込まれる過程でどのような力学や動機が働くかを明らかにするところにある。この点にホルチャビリグの研究は及んでいない。

冒頭に示した目的は、以上のような先行研究の現状と、自身がおこなってきた研究の実態を踏まえて設定したものである。

2. 『智慧の灯火と呼ばれる宝の綱要』(BJ) の文献学的研究

この BJ の写本は、現在内モンゴル社会科学院図書信息中心に所蔵されている。毛頭紙

に黒墨、毛筆書き、19×17 cm、34葉74面。この写本の筆跡をよく観察すると、かつて内モンゴル社会科学院に勤務していたセイノイロブ (Seyinoyirub) 氏のものであることがわかる。よってこの写本そのものは原本ではなく、かなり後代の写しである。

この史料は、上述したように、ホルチャビリグによって学界にはじめて紹介された。この文献の調査に当たっては、留学時代の恩師である内モンゴル社会科学院歴史研究所のチョイジ教授より多大なご後援をいただいたことを特に記して謝する次第である。

なお、本稿脱稿後に楊海英教授から提供された情報によると、オルドス地方の文献所蔵機関にも BJ の写本が所蔵されているとのことである。遺憾ながら、時間的制約があり筆者はこれを実見調査できなかった。

(1) スマティダルマキルティ著『明らかな鏡』との関係

ホルチャビリグは、この BJ のはじめの7葉はスマティダルマキルティ著のホトクタイの伝記『明らかな鏡 (gegen toli. 以下 GT と略す)』の一部内容を部分的に編集して書いたものであり、その上、ロブサンドゥンルブの『ハンたちノヤンたちの根源を簡単にまとめて示した智慧の灯火 (qad noyad-un ündüsüle-i tobčilan quriyažu üjügülügen bilig-ün jula)』のあとに名前を付けないままにつなげて写したものである、と述べている³⁵。筆者が調査したところ、BJ とロブサンドゥンルブの『ハンたちノヤンたちの根源を簡単にまとめて示した智慧の灯火』との間には、テキスト上の関係があることは確認できなかったが、GT と BJ のテキストには、両者酷似している部分がたしかにある。おそらくどちらかが他方を参照して引用したものと推測される。下の表で、BJ と GT のテキストから一部を取り出して比較してみる。

上下を比較すれば、両者にはごくわずかな語レベルの違いがあるだけで、いわば、丸写しに近い状況を示していることがわかる。

〈表1〉BJ (01: 01-02: 11. 上段) と GT (03a01-03b10. 下段) の比較

| | |
|---|--|
| namo güriü bazar dhar_a sumadi karti-a. amitan бүкүн-дүр sayin mör-yi üjügülügči burqan erdeni. adqay-tu | namo güriü bazar dahar_a sümadi karti y-a. amitan бүгүде-дүр sayin mör-yi üjügülügči burqan erdeni. adqay-tu |
| nigül jobalang-nuryud-i arilyayči nom erdeni. ayui yeke buyan-u orun qutuytan quvaray erdeni. asida-yin | jobalang-nuryud-yi arilyayči nom erdeni. ayui yeke buyan-u orun qutuytan quvaray erdeni. asida-yin |
| abural degedü yurban erdeni-ber adisla. yurban çay-un burqan бүкүн-i quriyaşan bey_e-tü. yurban ayimay | abural-un degedü yurban erdeni. adasla. yurban çay-un burqan бүгүде-i quriyaşan bey_e-tü. yurban ayimay |
| saba udq_a-yi ayiladdugči Jarliy-tu. yurban surtal-bar maşi sayitur amurlişan sedkil-tü. yurban abural-un | saba-yin ayiq_a(?)-yi ayiladdugči Jarliy-tu yurban surtal-bar masi amurlişan sedkil-tü. yurban abural-un |
| mön çinar blam_a-dur-ıyan mörgümü. qaral ügei orun-taki amintab_a burqan ba. qayurmay ügei abural-un degedü | mön çinar blam_a-dur-ıyan mörgümü. qaral ügei orun-taki amintaba burqan ba. qayurmay ügei abural-un degedü |
| bančın erdeni. qarangyui töb-yi geyigülügči boyda sodnamJamso tan-a. qayaçal ügei süstüg bişirel-ıyer Jalbarımı | bančın erdeni. qarangyui töb-yi geyigülügči boyda sodnamJamso tan qayaçal ügei süstüg-ıyer Jalbarımı |

| |
|---|
| abura. burqan baγši bavanggirid ayiladduγsančılan kü. buruγutan könügegçi qouratan dayisud-i ečülgen. buyan abura. burqan baγši vevanggerid ayiladduγsan čılan kü buruγu-tan könügegçi qourtan dayisud-i ečülgen. buyan |
| nom-un jirum yosu-ni toγturaγu delgegsen. boyda činggis eγin man-i ürgüljide ibege. enedkeg-ün orun-taki nom-un jirum yosu-yi toγturaγu delgegsen. boyda činggis eγin man-u örüsiyen ibege. enedkeg-ün orun-daki |
| čoyčis-un qaγan bodisüg tere ber. ene kü mongγul orun-a qubilju γaruγsan üiles Jökial-un dürsü-yi. endel ügei čoyčas-un Jerüken bodisug tere ber ene kü mongγul-un orun-a qubilju γaruγsan üiles Jökial-un yosu-yi. endel ügei |
| čideg-ün tolin-dur masi todurqayilan oruγulqu amu. eriγü medeküi küsenčid ber egün-e sayitur üjigdeküi e_e. čideg-ün tolin-dur todurqayilan oruγulqu amu. eriγü medeküi küsegčid ber egün-e sayitur üjetügei j_e. |
| tende-eče man-u ene orun-a qubilju manduγsan qutuγtai sečin qung noyan bolbasu tayizu boyda činggis eγin-ü tende-eče man-u. ene orun-a qubilju manduγsan qutuγtu sečin qung noyan bolbasu tayinzu boyda činggis eγin |
| iγayur ündüsülel-dür tegün-ü ündüsülel-dür |

(2) 内容と構成

BJには、このようなGTのテキストと酷似した部分、言い換えればGTとの共通内容が存在する部分と、そうでない部分がある。このことを確認するために、〈表2〉にBJの内容を55に分け、GT(A本)³⁶との内容を対比した。

〈表2〉BJとGTの内容の比較

| No. | 内 容 | BJ 箇所 | GT(A本)箇所 |
|-----|--|-------------|-------------|
| 1 | 婦敬偈 | 01:01-02:04 | 03a01-03b04 |
| 2 | 著述意図 | 02:05-02:08 | 03b05-08 |
| 3 | ホトクタイの家系と生年 | 02:09-03:10 | 03b09-04a08 |
| 4 | ホトクタイの生来の聡明さ | 03:11-03:12 | 04a09-11 |
| 5 | ホトクタイの第一次オイラド戦 | ----- | 04a11-04b03 |
| 6 | ホトクタイがシルジムジという三谷の合流点に至りオチル=トマイらをオルドスに連れ帰ったこと | 03:12-07:05 | 04b03-06a01 |
| 7 | アルタンが順義王号を得たこと | ----- | 06a01-08 |
| 8 | ホトクタイの息子・弟らがトクモクと戦い戦死したこと | ----- | 06a08-06b09 |
| 9 | ホトクタイがトクモクに報復したこと | ----- | 06b10-07b01 |
| 10 | ホトクタイの第二次オイラド戦 | ----- | 07b02-10 |
| 11 | 第二次オイラド戦でオルドスのボヤン=バートル=ホンタイジがエセルベイ=ヒアに殺されたこと | ----- | 07b10-08b04 |
| 12 | ホトクタイがボショグトをジノン位につけたこと | ----- | 08b04-10 |
| 13 | アルタンの発心 | ----- | 08b10-09a04 |
| 14 | ホトクタイがソナムギャンツォ(ソドノムジャムツ)と会見することをアルタンに説得したこと | 07:05-08:06 | 09a04-13 |
| 15 | ソナムギャンツォに使者を送ったこと | 08:06-08:12 | 09a13-09b08 |

19～20世紀前半のオルドスにおける外来文化要素の受容過程に関する一考察

| | | | |
|----|---|-------------|-------------|
| 16 | ソナムギャンツォがアルタンと会見することを返答したこと | ----- | 09b08-13 |
| 17 | 青海地方のチャブチルという所に仏堂を建て、そこにアルタンが到着したこと | ----- | 09b13-10a03 |
| 18 | ソナムギャンツォへ第一次迎接使派遣 | ----- | 10a03-08 |
| 19 | 第二次迎接使派遣 | ----- | 10a08-10b04 |
| 20 | 第三次迎接使派遣 | ----- | 10b04-10 |
| 21 | 第四次迎接使派遣（ホトクタイ参加） | 08:12-09:03 | 10b10-13 |
| 22 | 会見以前にソナムギャンツォがアルタンとホトクタイに神変を示したこと | ----- | 10b13-11b08 |
| 23 | ソナムギャンツォとアルタン、ホトクタイが前世から施主と帰依処の関係にあったことの説明 | ----- | 11b08-12 |
| 24 | アルタンの前世がフビライで、ソナムギャンツォの前世がパクパであったこと、パクパがフビライに灌頂を受け、フビライがパクパに大量の布施と称号を与えたこと | ----- | 11b12-12a07 |
| 25 | ホトクタイの前世が古代インド・マガダ国のピンビスーラ王であったことの説明 | ----- | 12a07-09 |
| 26 | セチェン＝ダイチンとオチル＝トマイ＝ホンチャンの前世の説明 | ----- | 12a09-12b05 |
| 27 | アルタン、ホトクタイらチャブチル寺でソナムギャンツォに大量の布施 | 09:04-10:05 | 12b05-13a04 |
| 28 | ホトクタイの宣言により会見開始 | 10:05-12:13 | 13a04-14a03 |
| 29 | 法の禁令を定めたこと | 12:13-14:04 | 14a04-14b05 |
| 30 | モンゴル諸侯がソナムギャンツォにダライラマ号を捧げ、ソナムギャンツォがモンゴル諸侯にそれぞれ称号を与えたこと | 14:04-15:07 | 14b05-15a09 |
| 31 | ソナムギャンツォがニロム＝タラに向かうことを告げ、ホトクタイをふくむモンゴル諸侯がモンゴルの地で為すべき仏教振興事業（寺院建立、ガンジョールの完成）を約し、モンゴルにトンコル法王が派遣されたこと | 15:07-17:03 | 15a09-16a01 |
| 32 | ニロム＝タラで寺院建立中に起こった出来事 | ----- | 16a01-17a01 |
| 33 | ジャン国王がソナムギャンツォに使者を送り布施したこと | ----- | 17a01-18a07 |
| 34 | ニロム＝タラの寺に屋根をかけたこと | ----- | 18a07-18b02 |
| 35 | サイソン＝ボムボ＝ナムジがソナムギャンツォの前で出家してすぐに死んだこと | ----- | 18b02-19a08 |
| 36 | 隆慶帝がホトクタイにロン＝ホ＝チャン＝ハーン＝ユンワン号を授けたこと | ----- | 19a08-19b02 |
| 37 | アルタン危篤に陥り、トゥメドに仏教に反対する動きが起こる。アルタンとホトクタイが仏教を栄えさせるための方策を定めた後、アルタンが死亡 | ----- | 19b02-21b04 |
| 38 | ソナムギャンツォ、モンゴル巡錫途上に甘粛省に招かれたこと | ----- | 21b04-22b02 |
| 39 | ソナムギャンツォ、ホトクタイの領地に至って灌頂を授けたこと | ----- | 22b02-23a01 |

| | | | |
|----|---|-------------|-------------|
| 40 | ソナムギャンツォ、ボショグト=ジノンの領地に至り、寺院を建立すべき場所を指図し、ボショグト、ホトクタイ、セチェン=ダイチンに灌頂を授け、三者が和平を約したこと | ----- | 23a01-08 |
| 41 | ボショグトが寺院を建立し、釈迦牟尼像を完成させ、マイダリ法王を招いて落慶法要を営み、マイダリ法王に大慈法王号を捧げたこと | ----- | 23a08-23b05 |
| 42 | ソナムギャンツォがフヘホトにいたり、アルタンの遺体を火葬に付したこと | ----- | 23b06-24a02 |
| 43 | 前世の悪行のため魔羅に変じたアルタンの妻妾モロム=ハトンをソナムギャンツォが調伏したこと | ----- | 24a02-25b03 |
| 44 | ソナムギャンツォがハラチンに向かったこと | ----- | 25b04-05 |
| 45 | ホトクタイが108巻のガンジョールを完成したこと | 17:03-17:08 | 25b05-10 |
| 46 | ホトクタイ死亡 | 17:08-18:08 | 25b10-26a08 |
| 47 | ウルズイー=イルドゥグチの生涯簡述 | 18:08-19:04 | 26a08-26b05 |
| 48 | オチル=トマイの子が比丘戒を受けたこと | 19:04-19:12 | 26b05-11 |
| 49 | オチル=トマイの子がトゥプ=タイジと共にチベットに赴きパンチェン=エルデニよりゲロン=ジャルサン=バンディダ号を授かったこと | 19:13-20:10 | 26b11-27a08 |
| 50 | ゲロン=ジャルサン=バンディダの子ロブサンボンツァグがチベットに赴き、パンチェン=エルデニよりライジャルサン=バンディダ号を授かったこと | 20:10-21:07 | 27a08-27b05 |
| 51 | パンチェン=エルデニがライジャルサン=バンディダに聖物を与えたこと | 21:08-23:04 | 27b05-28a11 |
| 52 | 聖物を祀った所について | 23:04-24:11 | 28a11-29a04 |
| 53 | ナムタイ=ホンタイジがハラチンに至り、ソナムギャンツォをチャハルに招いたこと | ----- | 29a04-29b04 |
| 54 | ソナムギャンツォが入寂の兆候を示したこと | ----- | 29b04-30a02 |
| 55 | ソナムギャンツォが万曆帝の使者と会ったこと | ----- | 30a02-30b07 |
| 56 | ソナムギャンツォがチャハルのトゥメン=ハーンの使者と会ったこと | ----- | 30b07-31a08 |
| 57 | ソナムギャンツォがジロムタイで入寂、その化身がスメル=ダイチンの妃に生まれ、ソナムギャンツォの転生と認定されたこと | ----- | 31a08-32a12 |
| 58 | ソナムギャンツォの化身がチベットに至り、パンチェン=エルデニより比丘戒を受けヨンテンギャンツォ(ヨンドンジャムツ)と名を馳せたこと | ----- | 32a12-33a08 |
| 59 | ウルズイー=イルドゥグチの子バト=タイジが軍功によりバトル=セチェン=ホンタイジ号を、バト=タイジの子サガンがエルヘ=セチェン=ホン号を受けたこと | 24:11-26:10 | 33a08-34a05 |
| 60 | サガンの子孫、チョイルジモ、ガリンダラ、サインオヨト、ハルハ、ガンジョールらの功績について | 26:10-28:11 | ----- |

| | | | |
|----|--|-------------|-------|
| 61 | ガンジョルの息子トイが清の協理台吉となり、さらにオルドスの王侯らからメルゲン＝アハイ＝ノヤンという称号を贈られたこと | 28:12-29:07 | ----- |
| 62 | トイと妃、息子ゴンチョグジャブラ、チベット巡礼の旅に出立 | 29:07-30:02 | ----- |
| 63 | アムドに至りクンプム寺参拝 | 30:03-31:03 | ----- |
| 64 | トンコル寺参拝、シンザ活仏と後日のオルドス訪問を約し合う | 31:04-32:01 | ----- |
| 65 | チャガン＝ノモンハンやスムパ活仏に礼拝 | 32:01-32:09 | ----- |
| 66 | マチン＝ボムラのオボーを祀る | 32:09-32:13 | ----- |
| 67 | 呪師らの道行きの邪魔やゴロク地方の盗賊らを鎮める | 32:13-33:10 | ----- |
| 68 | ラサ到着 | 33:10-34:03 | ----- |
| 69 | ラサにある諸聖像に礼拝 | 34:03-35:05 | ----- |
| 70 | 九世ダライラマ・ルンドゥクギャンツォなどの活仏や高僧に礼拝 | 35:05-37:05 | ----- |
| 71 | タシルンポに向い、当地で七世パンチェン・ロサンベンデンテンペーニマに礼拝し、慰労のことはを賜る | 37:05-38:10 | ----- |
| 72 | 宿所で七世パンチェンより受けた厚遇 | 38:10-39:02 | ----- |
| 73 | タシルンポの聖像や聖蹟に参拝 | 39:03-41:01 | ----- |
| 74 | サジャ＝バンチン (SaJa bančin) のところに向かい、サジャ＝バンチンに礼拝して戻る | 41:01-44:09 | ----- |
| 75 | 七世パンチェンがモンゴルにおけるチンギス祭祀のことをたずね、チンギスを厚く祀っていることを賞賛する | 44:09-45:13 | ----- |
| 76 | 七世パンチェンがトイの祖先のことをたずねよい血筋であることを賞賛する | 46:01-47:05 | ----- |
| 77 | 宿所でサジャ＝バンチンのことはを解釈し、儀軌書を書かせることにする | 47:05-48:06 | ----- |
| 78 | 七世パンチェンに儀軌書著作を依頼する手紙を書く | 48:06-48:08 | ----- |
| 79 | 七世パンチェンがチンギス、ホトクタイ、サガン三人の儀軌書をチベット語で著す | 48:08-49:06 | ----- |
| 80 | 儀軌書通りの図像を描かせる | 49:06-49:12 | ----- |
| 81 | 七世パンチェンにカーラチャクラの灌頂を乞うて授かる | 49:12-53:07 | ----- |
| 82 | 帰郷に当たって七世パンチェンよりたくさんの贈り物をもらう | 53:07-55:01 | ----- |
| 83 | ラサに戻って新年を迎え九世ダライに礼拝 | 55:02-58:08 | ----- |
| 84 | ラサの諸寺に参拝 | 58:08-64:03 | ----- |
| 85 | 再び九世ダライに礼拝 | 64:03-64:13 | ----- |
| 86 | 図像を聖化し、持ち帰る書籍類を書写させる | 65:01-66:07 | ----- |
| 87 | 九世ダライに暇乞い。たくさんの贈り物をもらう | 66:07-68:08 | ----- |
| 88 | ラサを發ちクンプムにいるトイの弟らオルドス聖俗の迎接を受け続けて帰郷 | 68:08-69:13 | ----- |
| 89 | チンギスに礼拝、パンチェンの儀軌書をダルハドに渡して使用するよう命じる | 69:13-70:10 | ----- |

| | | | |
|----|----------------|-------------|-------------|
| 90 | 属下の借金対策を講じる | 70:10-72:02 | ----- |
| 91 | トンコル寺のシンガ活仏を勧請 | 72:02-74:06 | ----- |
| 92 | コロフォン | 74:06-74:11 | 34a05-35a05 |

以下、この表によって、BJ の内容構成の特徴を挙げることにしよう。

前半部分 (Nos. 1-59) は BJ と GT との間に共通した内容が多いが、GT にあって BJ に見えない内容 (Nos. 5, 7-13, 16-20, 22-26, 32-44, 53-58) もあること、後半部分 (Nos. 60-91) は GT との内容の一致が見えないことが確認できる。なお、No. 91 のコロフォンは、GT、BJ ともにそれぞれ固有のものを記述しているので斜体字にしてある。

No. 59 までの前半部分は、ホトクタイとホトクタイの侍僧であったオチル=トマイ (ET: Včir tümei [ヴチル=トゥメイ]) ならびにその子孫、サガンまでのホトクタイの子孫の活動に関する記述から成っており、後半部分は、サガンの後裔トイが、妃と息子ゴンチョグジャブらを連れておこなったチベット巡礼の記述と、巡礼から戻ったのちの出来事を三つを記したのち、コロフォンをもって全編を締めくくる。後半部分の前半がサガン以降のホトクタイの子孫の事績、とくにトイのチベット巡礼に関する記述から成っていることがわかる。

このように、BJ が前後半の二部から成っていることはすでにホルチャビリグが正しく指摘しており、その特徴としてあげている諸点のほとんどは、この後半部分に見える内容を捉えたものである³⁷。

(3) コロフォンにみえる情報

BJ の著年と著者の名前は、すでにホルチャビリグがコロフォン (No. 92) にしたがって正しく明らかにしている³⁸。ここではそのコロフォンの部分を示しておく。

bilig-ün ĵula kemegdekü erdeni-yin tobčiy_a. ene šasdar čedeg-i öčüken öglige-yin eĵin vangčinnorbu čing süsüg-ün egüden-eče bišireĵü šimdan kičiyeĵü bičibei. ulaĵan bečün ĵilün ebülün segül sarayin šineyin ĵurban-a öljeyitü sayin edür tegüsbei. (BJ, 74: 06-11)

著者 vangčinnorbu (ヴァンチンノルブ) が、ulaĵan bečün ĵilün ebülün segül sarayin šineyin ĵurban 「赤い猿の年の冬の最後の月の三日 (= 道光16 [1836] 年12月3日)」に執筆を終えたと明記されている。このヴァンチンノルブの素性は一切わからない。ホルチャビリグはこの人物をウーシン旗の仏教徒であったと推測している³⁹。

コロフォンに明らかになっているように、BJ の著年は1836年である。BJ と密接に関係することが明らかな GT は、1835年かそれをやや降る時期の著作である可能性があること

を筆者はすでに指摘している⁴⁰。GTが1835年内に成書した可能性があるのに対し、BJの成書は1836年であるので、筆者は、BJの著者ヴァンチンノルブが、GTを直接参照しつつ、共通部分はほぼ丸写しにし、一部の語尾を書き換えるなどの編集を加えたものと見ている。

(4) 著述意図・目的

No. 2はBJの著述意図を記した部分である。上の〈表1〉に、この部分と該当のGTのテキストを併記してある。これを見ればわかるように、ごく一部の語句が異なるだけであり、GTの著述意図と大きく異なるところはないことがわかる。

enedkeg-ün orun-taki coγčis-un qayan bodisüg tere ber. ene kü mongγul orun-a qubilju γaruγsan üiles jokiyaal-un dürsü-yi. endel ügei čideg-ün tolin-dur masi todurqayilan oruγulqu amu. eriγju medeküi küsenčid ber egün-e sayitur üjigdeküi e_e. (BJ, Nos. 1-2, 02: 05-08)

インドの地のチヨグチス王菩薩まさにその方がこのモンゴルの地に化身して現れた命運の姿を過つことなく伝記の鏡に大変に明らかにして〔書き〕入れているのである。求め知ることを望む者たちは、これをよくよく見るように。

「インドの地のチヨグチス王菩薩」とは、古代インドのマガダ国王ピンピサーラのことである。ホトクタイがこのピンピサーラの化身であるとされていることは、上に紹介したようにモスタートがすでに明らかにしている。そのピンピサーラの化身がこのモンゴルの地に転生しておこなった事を伝記にした、というGTの著述意図がほぼそのまま引かれている。ホトクタイの後裔のサガンがホトクタイの「化身」であることを明言した史料は今のところ確認していないが、もし、GTの著者スマティグルマキルティとBJの著者ヴァンチンノルブが、サガンを含むホトクタイの後裔がその化身であると認識していたとするならば、サガンとトイの事績を記しているBJの著述内容と、上に示した著述意図は合致していることになる。

(5) GTの記述の取捨の状態とその基準

ヴァンチンノルブはBJの前半部としてGTの何を取り何を捨てたのか。上の〈表2〉を記述の有無をもとに作り替えた〈表3〉と〈表4〉によって、取捨の状態を確認し、その基準が何であるかを明らかにしよう。

〈表3〉BJ前半部にあるGTの内容

| No. | 内 容 |
|-----|--------------|
| 3 | ホトクタイの家系と生年 |
| 4 | ホトクタイの生来の聡明さ |

| | |
|----|---|
| 6 | ホトクタイがシルジムジという三谷の合流点に至りオチル＝トマイらをオルドスに連れ帰ったこと |
| 14 | ホトクタイがソナムギャンツォ（ソドノムジャムツ）と会見することをアルタンに説得したこと |
| 15 | ソナムギャンツォに使者を送ったこと |
| 21 | 第四次迎接使派遣（ホトクタイ参加） |
| 27 | アルタン、ホトクタイらチャプチル寺でソナムギャンツォに大量の布施 |
| 28 | ホトクタイの宣言により会見開始 |
| 29 | 法の禁令を定めたこと |
| 30 | モンゴル諸侯がソナムギャンツォにダライラマ号を捧げ、ソナムギャンツォがモンゴル諸侯にそれぞれ称号を与えたこと |
| 31 | ソナムギャンツォがニロム＝タラに向かうことを告げ、ホトクタイをふくむモンゴル諸侯がモンゴルの地で為すべき仏教振興事業（寺院建立、ガンジョールの完成）を約し、モンゴルにトンコル法王が派遣されたこと |
| 45 | ホトクタイが108巻のガンジョールを完成したこと |
| 46 | ホトクタイ死亡 |
| 47 | ウルズイー＝イルドゥグチの生涯簡述 |
| 48 | オチル＝トマイの子が比丘戒を受けたこと |
| 49 | オチル＝トマイの子がトゥップ＝タイジと共にチベットに赴きパンチェン＝エルデニよりゲロン＝ジャルサン＝バンディダ号を授かったこと |
| 50 | ゲロン＝ジャルサン＝バンディダの子ロブサンボンツァグがチベットに赴き、パンチェン＝エルデニよりライジャルサン＝バンディダ号を授かったこと |
| 51 | パンチェン＝エルデニがライジャルサン＝バンディダに聖物を与えたこと |
| 52 | 聖物を祀った所について |
| 59 | ウルズイー＝イルドゥグチの子バト＝タイジが軍功によりバートル＝セチェン＝ホンタイジ号を、バト＝タイジの子サガンがエルヘ＝セチェン＝ホン号を受けたこと |

〈表4〉BJ前半部がないGTの内容

| No. | 内 容 |
|-----|--|
| 5 | ホトクタイの第一次オイラド戦 |
| 7 | アルタンが順義王号を得たこと |
| 8 | ホトクタイの息子・弟らがトクモクと戦い戦死したこと |
| 9 | ホトクタイがトクモクに報復したこと |
| 10 | ホトクタイの第二次オイラド戦 |
| 11 | 第二次オイラド戦でオルドスのボヤン＝バートル＝ホンタイジがエセルベイ＝ヒアに殺されたこと |
| 12 | ホトクタイがボショグトをジノン位につけたこと |
| 13 | アルタンの発心 |
| 16 | ソナムギャンツォがアルタンと会見することを返答したこと |
| 17 | 青海地方のチャプチルという所に仏堂を建て、そこにアルタンが到着したこと |

| | |
|----|---|
| 18 | ソナムギャンツォへ第一次迎接使派遣 |
| 19 | 第二次迎接使派遣 |
| 20 | 第三次迎接使派遣 |
| 22 | 会見以前にソナムギャンツォがアルタンとホトクタイに神変を示したこと |
| 23 | ソナムギャンツォとアルタン、ホトクタイが前世から施主と帰依処の関係にあったことの説明 |
| 24 | アルタンの前世がフビライで、ソナムギャンツォの前世がパクパであったこと、パクパがフビライに灌頂を授け、フビライがパクパに大量の布施と称号を与えたこと |
| 25 | ホトクタイの前世が古代インド・マガダ国のピンビサーラ王であったことの説明 |
| 26 | セチェン＝ダイチンとオチル＝トマイ＝ホンチャンの前世の説明 |
| 32 | ニロム＝タラで寺院建立中に起こった出来事 |
| 33 | ジャン国王がソナムギャンツォに使者を送り布施したこと |
| 34 | ニロム＝タラの寺に屋根をかけたこと |
| 35 | サイソン＝ボムボ＝ナムジがソナムギャンツォの前で出家してすぐに死んだこと |
| 36 | 隆慶帝がホトクタイにロン＝ホ＝チャン＝ハーン＝ユンワン号を授けたこと |
| 37 | アルタン危篤に陥り、トゥメドに仏教に反対する動きが起こる。アルタンとホトクタイが仏教を栄えさせるための方策を定めた後、アルタンが死亡 |
| 38 | ソナムギャンツォ、モンゴル巡錫途上に甘粛省に招かれたこと |
| 39 | ソナムギャンツォ、ホトクタイの領地に至って灌頂を授けたこと |
| 40 | ソナムギャンツォ、ボショグト＝ジノンの領地に至り、寺院を建立すべき場所を指図し、ボショグト、ホトクタイ、セチェン＝ダイチンに灌頂を授け、三者が和平を約したこと |
| 41 | ボショグトが寺院を建立し、釈迦牟尼像を完成させ、マイダリ法王を招いて落慶法要を営み、マイダリ法王に大慈法王号を捧げたこと |
| 42 | ソナムギャンツォがフヘホトにいたり、アルタンの遺体を火葬に付したこと |
| 43 | 前世の悪行のため魔羅に変じたアルタンの妻妾モロム＝ハトンソナムギャンツォが調伏したこと |
| 44 | ソナムギャンツォがハラチンに向かったこと |
| 53 | ナムタイ＝ホンタイジがハラチンに至り、ソナムギャンツォをチャハルに招いたこと |
| 54 | ソナムギャンツォが入寂の兆候を示したこと |
| 55 | ソナムギャンツォが万暦帝の使者と会ったこと |
| 56 | ソナムギャンツォがチャハルのトゥメン＝ハーンの使者と会ったこと |
| 57 | ソナムギャンツォがジロムタイで入寂、その化身がスメル＝ダイチンの妃に生まれ、ソナムギャンツォの転生と認定されたこと |
| 58 | ソナムギャンツォの化身がチベットに至り、バンチン＝エルデニより比丘戒を受けヨンテンギャンツォ（ヨンドンジャムツ）と名を馳せたこと |

これらの表によってわかることは、BJ に取られなかった部分の主人公がホトクタイやその後裔、ホトクタイの侍僧オチル＝トマイやその子孫ではなく、また、彼らの仏教との関わりに触れていない内容である場合がほとんどということである。言い換えれば、ホトク

タイと侍僧およびその後裔の仏教との係わりに関係する記述ばかりに集中させたということである。これがすなわち取捨の基準であったと考えてよいだろう。

すでに筆者は、BJが参照したGTが、サガンの著したETのうちからホトクタイに関する記述を選び出してホトクタイの伝記とすることを意識して完成された文献であることを明らかにした⁴¹。このように見てくると、ET → GT → BJの順に、ホトクタイと侍僧ならびに子孫へと記述の集中の度合いが強まっていることがわかる。

(6) トトイのチベット巡礼

ホルチャビリグの指摘するBJの特色ある記述⁴²は、トトイのチベット巡礼の部分(Nos. 62-88)に詰め込まれている。以下、この部分に見える興味深い情報を項目立てて整理してみよう。

1) トトイについて

巡礼記部分の主人公であるトトイについて、系統的に資料を収集したことがないこともたまたま、筆者はあまり知るところがない。ここでは、ハスピリグト⁴³やラグシャンプリン⁴⁴らが明らかにしているところによって、彼がどのような人物であるかを描写するにとどめておく。

実は、ここで「トトイ」と表記している人物は、モンゴル文字でTWDWYともTWD'Yとも表記される。これだけでも12通りの読み方がありうる。筆者はかつてこれをtodui(トドイ)と読んだことがある⁴⁵。ウーシン旗の人物にTWDWYあるいはTWD'Yをどう読むのかを尋ねてみたことがあるが、答えは一樣ではなかった。本稿では、こののち検討するチベット語文献がtho tosと表記していることにしたがって、totui(トトイ)と表記することにした。

トトイは、ウーシン旗のガルハタン=ハリヤーの東協理台吉。チンギスの26世孫。イエヘ=ポドンのバンチン=スメの北にあるシャンギーン=ホーロイ(šang-un qoyulai. ムンゲン=テブシ mönggün tebsi とも)⁴⁶に居住。18世紀末から19世紀初め、あるいは、1770年から1850年にかけて存命であったと思われる。『チンギス=ハーンの奏上と供物を捧げる行いを迅速に為すものというもの』を編み、チンギスとホトクタイ、サガンの図像の描き方を詳細に規則化し、祭祀のしきたりを記した。これに定めたとおりに、チンギスとホトクタイ、サガンの図像⁴⁷を描いた。これらを1830年にチベットのタシルンポで七世パンチェンに開眼させて持ち帰った。このほかにも三編の歌詞を作った。ウーシン=ジョーに時輪学院を創建し、チベットのアムドの地からシンジン⁴⁸=エルデニ活仏を勧請し学院の落慶法要をおこなわせた。バンチン=スメをモー=トホイ(mayu toqui)というところからイエヘ=ポドンのホンドライ=シリ(qondulai sili)という地に移した。以上のような事績が明らかにされている。

2) 七世パンチェン作の儀軌書の将来

トトイ一行の行程は上の〈表2〉によって理解してもらうこととして、ここでは本稿の主たる目的である、ウーシンの地に、チベットからどのように祭祀儀軌が将来されたのかをたどることとする。

トトイ一行は1811年にオルドスを発ち、アムドのクンプム寺、トンコル寺を経てラサから七世パンチェンのいたタシルンポに至った。さらにトトイ一行は、七世パンチェンより乗用馬を与えられて、サジャ＝バンチンのところに赴いた。サジャ＝バンチンに礼拝してたくさんの供養の品を捧げるなどして、タシルンポにもどった。そして、「尊い御前 (boyda gegen)」すなわち七世パンチェンに布施を捧げたときのこととして、

basa tere üyes-dür boyda gegen-e binavad beledün ergüjü uçaran mörgüküi çaytur. mergen aqai noyan-i deger_e saγudal-dur saγulγaγu. orun γaγarun aγui yosu yerü kiged ilangγuy_a boyda činggis eγin-ü bumba onγun-u orušil čomčuy teregüten yambar metü bayiyuluγsan ba. takily_a tayily_a kögγim jiyayaγal dürim yosulal-un jüil-i maši delgerengγüi-e jarliy bolun asaγuγsan-a. (BJ, No. 75, 44: 09–45: 03)

尊い御前に布施を捧げたとき、メルゲン＝アハイ＝ノヤン (mergen aqai noyan) ことトトイに、土地の偉大なしきたりの全容と、とくにチングスの聖なる陵の所在する小さな天幕 (čomčuy) などがどのように建てられているか、祭祀のしきたりの類を細かく質問したという。これにトトイが詳しく答えたのを聞いて、尊い御前すなわち七世パンチェンは大いに喜び賞賛して、

tan-u ordus-un orun-taki činggis qaγan bolbasu. edügeki ene čöb-ün çaytur. burqaγ-u šaγin-i sakiγči yeke küčüttü nom-un sakiγulsun mön büged. tegün-i takin šitügči-nuγud ber ču. saγad jidker amurlin sayin üiles qurdun küselčilen bütüküi kiged. činggis tere ber nasuda sakin ibegekü-yin šitün barilduly_a aγuu yeke bui bolai kemen ayiladqu ba. (BJ, No. 75, 45: 06–13)

オルドスの地にあるチングス＝ハーンは、いまのこの闘争時に、仏教を守護する大きな力ある護法尊に相違ないのであって、それを祀り信仰する者たちも障りが鎮まりよい行いが素早く望んだとおりに成就することと、チングスその方も永く護り慈しむ道理が大いにあると言った、という。さらに続けて七世パンチェンは、

basa činggis eγin-ü iγaγur ündüstülel ači ür_e sačuraγu γaruγsan ba. tan-u ebüge udum ken bui kemen asaγuγsan-dur (BJ, No. 76, 46: 01–03)

主チングスに根源を持つ子孫たちのことと、トトイの先祖は誰かを問うた。これに対してメルゲン＝アハイ＝ノヤン＝トトイはチングスの子孫らの分布を説明したのち、

minu uy bolbasu boyda činggis qayan-u arban isüdüger üy_e-yin ači čoyčis-un jirüken qutuγtai sečin qung noyan. tegün-ü γurbaduγar üy_e-yin ači sayang sečin qung. tegün-ü tabuduγar üy_e-yin ači minu ečiγe tusalayči tayiγi ganγur kememü. (BJ, No. 76, 46: 08-13)

自分の直系の先祖として、チングスの十九世孫ホトクタイ、その曾孫サガン、その五世孫にあたる父ガンジョルを挙げた。これを聞いた尊い御前すなわち七世パンチェンは大いに賞賛して、

a_a eyimü bolbasu noyan tan-u uy iγayur maši ariγudduγsan batu sayin bolai kemen ayiladbai. (BJ, No. 76, 47: 03-05)

トトイの系統は大変に清浄で堅固であると仰った、とある。

七世パンチェンが、オールドスで護法尊チングスを祀っていることを褒めてこれをよしとし、さらにホトクタイとサガンを含むトトイの直系の流れを清浄であると述べたことをうけて、トトイ一行は次のような行動を起こす。

tendeče sayuγsan naisang-dur ireged. mergen aqai noyan ber mön qošiγun-ača. tegüsčoytu barayibung gomang rasang deger_e sayuγsan yeke buyan-u sadun diyanči lharamba sodnamdobdan ba gübüm keyid deger_e sayuγsan yeke buyan-u sadun diyanči rabγimba aga monlam nar-luγ_a jöbleldün. boyda gegen ber ene metü. činggis eγin šaγin-ü yeke sakiγulsun büged. amitan-i sakin ibegekü-yin üiles yeke bui kemen ayiladduγsan egün-i šinγilebesü mönkü eγin boyda tegün-ü qangγal namančilal delgerenggüi-e nigen-i jökilyabasu jökistai kemegsen-e. qoyar buyan sadun ber ču edüγe činggis eγin-ü üiles jökial delgereküi-yin čay boluγsan maγad tula. tere metü nigen-i jökialγabasu masi sayin kemen ayiladdulčiyad. (BJ, No. 77, 47: 05-48: 06)

宿所に戻って、メルゲン＝アハイ＝ノヤン＝トトイは、デブン寺ゴマン学堂のウーシン出身のララムバ・ソドナムドブダンと同じくウーシン出身でクンプム寺に住するラブジャムバ・アガ＝モンラムを相手に、主チングスが護法尊であり衆生を護り慈しむ行いが大いにあると尊い御前である七世パンチェンが仰ったことを考えるに、まさにその聖なる主チングスを満足させチングスに懺悔する儀礼を詳しく作るのがよいと発言した。これに対して二人のウーシン出身僧も、今や主チングスの行いが広まる時になったに相違ないので、そのようなものを作るのは非常によいと言った、とある。そこで、二人の僧は、

tedüi ayiladγal-un bičig-yi töbed-iyer bičiγü. boyda bančin erdeni-yin gegen-e ergübesü. (BJ, No. 78, 48: 06-08)

この件を奏上する書簡をチベット語で書き、七世パンチェンに捧げたという。その結果七世パンチェンは、

mön činggis ejin-i töb dumda egüsken. barayun eteged čoyčis-un jirüken qutuytai sečin qung noyan. jегün eteged-dür sayang erke sečin qung noyan-luy_a selte. erkin nökir yurbaýula-yi egüskekü-yin jang üile ilegte onul jalaly_a takily_a qangyal namančilal. sang maytayal dayadyal duridyal selte büriddüysen masi delgerenggüi nigen-i jokiyaju qayiralaysan bülüge. (BJ, No. 79, 48: 08–49: 02)

まさにその主チンギスを真ん中に現し、右側にホトクタイと左側にサガンの尊い眷属の三人を現すしきたり、招請、祭祀、供犠、懺悔礼拝、献香儀礼、賞賛、祈願、憶念をいっしょにしてまとめた、大変に詳しいものを作ってくださったのだった、とある。

この、「大変に詳しいもの」、つまり「チンギスを真ん中に現し、右側にホトクタイと左側にサガンの尊い眷属の三人を現すしきたり、招請、祭祀、供犠、懺悔礼拝、献香儀礼、賞賛、祈願、憶念をいっしょにしてまとめた」ものとは、ホルチャビリグラ関連の先行研究のいう、『チンギス＝ハーンの現観論、招請、供犠、懺悔礼拝、賞賛、祈願などを揃え含めた堅い武器というもの』、あるいは、『チンギス＝ハーンの奏上と供物を捧げる行いを迅速に為すものというもの』のチベット語原典である。この原典については後ほど触れるが、この「大変に詳しいもの」の内容がBJの著者ヴァンチンノルブにも知っていたことは、

enekü boyda ejin erkin nökir yurbaýula-yin bey_e-yin öngge. mutur-un belges oruşıqui-yin bayidal yambar metü-yi. egün-ü ilegte onul egüskekü-yin jang üile-eče medegdeküi bolai. (BJ, No. 79, 49: 02–06)

このような聖なる主、尊い眷属三人のお体の色、御手の微の有り様がどのようなものであるかは、この現観のしきたりから知れるのである、と記されていることから判明するが、ヴァンチンノルブのいうものがチベット語原典なのか、モンゴル語訳なのかは明らかではない。

この「大変に詳しいもの」である儀軌書が七世パンチェンによって作られたのち、トトイはそれを実際に図像にしている。これについては、

tendeče činggis ejin nökir selte-yin körüg-yi ilegte onulčilan jiruyulun büttügejü. boyda bančin-u mutur-dur ergüged. boyda-yin dergede olan qonuy talbiju. maši orušin adistid-yi sayitur šinggegen. ilyaltai-a yeke šitügen bolaju qayiralaysan-i. edüge büncuygandančoyiling kemekü bančin-u süm_e deger_e takiju bui. (BJ, No. 80, 49: 06–12)

それから、主チンギスと眷属の図像をはっきりと現して描かせ完成し、聖なるパンチェンの御手に捧げて、聖なるお方のかたわらに何日もおいて、大変よくあらせ、加持を染みこ

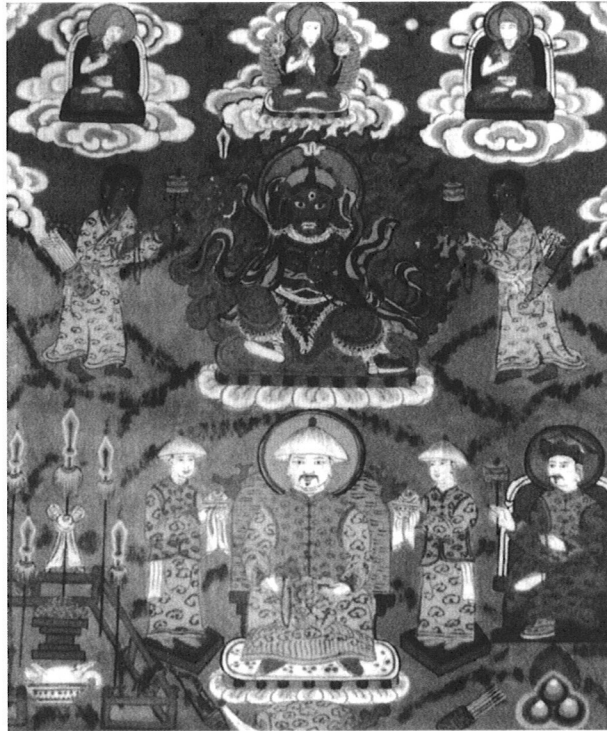


図1：「赤い主 (ulayan ejen)」(楊『モンゴル草原の文人たち』写真 11)。
一部拡大写真を文末に載せてある。

ませ、際だって大いなる信仰の崇拜としてくださったのを、今はブンチョグガンダンチョイリンというバンチン寺で祀っている、とあるところから、BJが著された時代にもこの図像がバンチン寺で祀られていたことがわかる。この図像が、現在の祭祀の本尊の一つである「赤い主 (ulayan ejen)」である⁴⁹。

この儀軌書と図像は1812年9月トトイらのオルドス帰着と同時にオルドスの地に将来された。

darayabar tusalayči mergen aqai noyan aga selte. tayizu boyda temüjin činggis qayan-i ačilan ĵula takil nindar sarqud ödke selte-yi ayuu yeke ergüjü mörgüged. boyda bančin erdeni-yin ĵokiyaysan. ilegte onul-un ĵang üile-yin sudur-i bingtü darqan ĵayisang batujıryal. čing kičiyeltü mergen tayiši biligündalai tan-a tuşıyan öggüjü. qoyišida tasural ügei sudurun ĵang üile čilen. aşıda unğşıĵu takiqui-bar toytayan. basa takil-un ed altan širaysan ĵis büriy_e mönggün biskigür teregüten keregsel-i büridken ergübei. (BJ, No. 89, 69: 13–70: 10)

この記述には、メルゲン＝アハイ＝ノヤン＝トトイとご子息は、太祖聖テムジン＝チン

ギス＝ハーンの恩に謝し、供物、ハダク、御神酒を大量に捧げ礼拝して、聖バンチン＝エルデニの著した現観のしきたりの経を、ピント＝ダルハン＝ジャイサン・バトジルガル、チン＝ヒチエルト＝メルゲン＝タイシ・ビリグンダライ様に与え、のちに絶えることなく経のしきたり通りに、永く唱え祀るよう定め、また、供物の品、金をはめ込んだ銅のラツパ、銀の筆架などの用品を揃えて捧げた、とある。ここに見えているバトジルガルとビリグンダライのうち、ビリグンダライの名とバトジルガルの帯びた称号ピント＝ダルハン＝ジャイサンは、現在にまで伝わるチンギス祭祀を司るダルハド集団の頭領格として、1835年にトトイの息子ゴンチョグジャブが編んだ『真珠の数珠 (*subud erike*. 以下 SE と略す)』にその名を確認できる⁵⁰。このことから、トトイは、チベットから持ち帰った儀軌書をチンギス祭祀の場に持ち込み、永くこの儀軌にしたがうよう定めたことがわかる。BJ には、こののち儀軌書や図像がどうなったかについては記述がない。

3) 不自然な記述の終結か？

トトイのチベット巡礼ならびに後日談に続けて、事績が二つ記述されている。その第一は、トトイが旗民の漢人よりの莫大な借金を軽減した善政について (No. 90)、その第二は、ウーシン＝ジョーにアムドのトンコル寺のシンザ活仏 (*duyingqur keyid-ün šingza boyda gegen*) を招いたこと (No. 91) である。

筆者の手にある BJ は、このシンザ活仏が密乗のたくさんの法の灌頂を与えたことをもって本文が終結し、コロフォン (No. 92) に入るが、ホルチャビリグが「後ろの方から部分的に落とされた」と指摘しているように⁵¹、No. 91 の終わり方は史書の本文の終わり方としてはやや不自然な感じを抱かせるものとなっている。コロフォンとつながる部分を下に示す。

jiči basa boyda olan bügüdeger-dür. mör-ün jerge-yin kötelbüri-ber ekilejü. niyuča tarnis-un olan nom-un vang lüng-i qayiralayad. bilig-ün jula kemegdekü erdeni-yin tobčiy_a [後略] (BJ, Nos. 91-92, 74: 03-06)

シンザ活仏が皆に、道次第の解説からはじめて密乗のたくさんの法の灌頂を賜ってから、『智慧の灯火と呼ばれる宝の綱要』[後略]

「賜ってから (*qayiralayad*)」で本文の記述が終結し、コロフォンに入るのはたしかに不自然であり、途中で執筆を中断したかのようである。ただし、セイノイロブと思われる写字者が用いた原本に落丁などがあった可能性もある。現状ではこの問題を解決することはできない。たとえば、楊海英のいうオルドス所在の他本との比較が必要であろう。よってここではこの問題には深入りせずに、内モンゴル社会科学院蔵の BJ には、テキストが欠落している可能性のあることだけを指摘しておく。

4) 文献学的見地からのまとめ

以上、文献学的見地から、BJの全体的内容構成と突出した特徴を明らかにした。

BJは1836年にウーシン旗の仏教徒と思われるヴァンチンノルブによって著された。

この書は大きく前半と後半に分かれる。前半は、1835年かそれをやや降る時期にウーシン＝ジョーの高僧スマティダルマキルティがホトクタイの伝記として著したGTからホトクタイとその侍僧オチル＝トマイならびに彼らの後裔たちの事績を多く引用している。しかし、ホトクタイの事績に関しては、主にホトクタイが主人公であって、しかもその仏教的事績を記した記述に絞ってほぼそのまま引用しているという特徴が見られる。このことは、ETに見えるホトクタイに関する記述をほぼそのまま引用する形でホトクタイの伝記として成立したGTの記述から、さらに目的外の人物が登場する部分を極力削除することで、ホトクタイとその侍僧ならびに後裔の伝記としての集中度をさらに高めたものであると言うことができよう。

後半部は、ホトクタイとサガンの直系の子孫であるトイのチベット巡礼記と、旗民の借金対策、高僧の勧請が記されている。筆者の探究不足もあるかもしれないが、BJは、これまであまり広く知られることも、研究に用いられることもなかった、モンゴル人が書いたモンゴル王侯のチベット聖地巡礼記として興味深い。本報告では詳しく取り上げることができなかったが、モンゴル人がチベットのどのようなところをめぐるのか、どのような布施を献ずるのか、高僧に何を願うのか、チベットから物心両面でどのようなものごとを得て帰るのか、などが細かく描写されている。

このような詳細な記述を残し得たヴァンチンノルブは、トイとその息子ゴンチョグジャブに極めて近い人物であったことは推測に難くない。トイ父子の側付きの筆者として彼らのチベット巡礼に同行したのかも知れないし、彼らから直接にチベット巡礼の話聞くことができた人物であったかも知れない。あるいは、文書や史書を扱う職を得ていて、文字に残されたトイ父子の情報に接しやすい立場の人間であったのかも知れないが、このようなヴァンチンノルブの素性はいずれも推測の域を出ない。

この後半部の記述がもつ重要性はすでにホルチャビリグが指摘している⁵²。これまで十分に明らかにならなかったサガンの子孫の系譜を補足できることや、メルゲン＝アハイ＝ノヤンがトイの称号であることなどを挙げるができるが、とりわけ重要なのは、トイが七世パンチェンに請うてチングスとホトクタイ、サガンを祀る儀軌書を書かせたこと、またその儀軌書に基づいてチングスとホトクタイ、サガンの三人を描いた図像を制作させたこと、儀軌書がチングス祭祀のダルハドに与えられたこと、図像はBJ成書時にはバンチン寺で祀られていたことなど、19世紀前半のオールドスにおける祖先(偉人)崇拜に関する記述である。

未解決のままにしておく問題が二つある。一つ目は、BJの本文は、記述が中途に終わったかのような印象を与える問題である。これは原本の段階で起こったことなのか、筆者の

手元にあるセイノイロブの手になると思われるごく新しい時代の写本の書写段階で起こったことなのか、あるいは仮称セイノイロブ写本の未発見の底本の段階で起こったことなのかは、仮称セイノイロブ写本の底本やオルドスに存在すると伝え聞く他の本との照合を経てはじめて明らかにしうる問題として結論を保留する。二つ目は、1835年から1836年にかけてのウーシンにおける史書著述活動の全容とその背景である。1835年には、BJの主人公の一人であるトイの息子ゴンチョグジャブが『真珠の数珠』を著している。また、SEとほぼ同時かそのわずかな後に、ガンジョール寺ことウーシン＝ジョーの高僧スマティダルマキルティがGTを著している。そして1836年にはBJが著されている。すでに拙稿や楊海英⁵³が明らかにしているように、SEとGTはそれぞれのテキストの中で相互参照を指示していることや、SEの著述に当たってGTの著者であるスマティダルマキルティがゴンチョグジャブを支援したことなど、大変に密接な相互関係をもっている。そしてBJは、GTから必要な部分のみを書き抜いて前半部を構成している点でGTとの密接な関係を有し、著者ヴァンチンノルブがトイとSEの著者ゴンチョグジャブに大変近い人物であったと思われることから、SEとの人間的関係を持っていることが推測される。また注目したいのは、この三書がそろってオルドスにおける祖先（偉人）崇拜に結びついていることである。SEは、インドとチベットの帝王らの歴史を記した後にモンゴル帝国・元朝のハーンの歴史をチンギス中心に記し、時代が著者に近くなった清朝期の記述になると、その著者特定の著述意図に沿って記述の焦点を絞るといふ、モンゴル語史書の一つの典型的な体裁を採っている。SEの内容上の特徴は、オルドスにおける祖先（偉人）崇拜群の主たるものであるチンギスの祭祀に関わる記述にあるといえることは、ハイシツヒや楊海英がつとに指摘している⁵⁴。一方のGTは、ホトクタイの侍僧オチル＝トマイの子や孫がチベットを巡礼した時に四世パンチェンから賜った数々の聖物のことや、これら聖物がオチル＝トマイの子や孫が住した寺院とサガンの菩提寺に安置されていることが記されていることに一つの特徴がある。すでに拙稿で明らかにしたが、この聖物やその安置については、こののちに取り上げる『ササ祭祀の経』というホトクタイとサガンの祭祀に関する重要文献にも記されていることから、GTが彼ら“二人のセチェンの祭祀”に結びついているといえる。さらにいえば、著者スマティダルマキルティはラグシャンブリンが収集したサガン祭祀に関係する文献のなかの『穀物の神カナバディの献香 (*tariyan tngri kanabadi sang*)』⁵⁵や、モスタールトが紹介した『サガン＝エルへ＝セチン＝ホンの経』という祭文をロブジャンチョイラグの名で著している⁵⁶。そしてBJが“二人のセチェンの祭祀”に関係の深い文献であることはすでに上で明らかにした。このように相互に関係があり、ある一定の記述の方向性が見える三書が1835年から1836年の二年間にかけて集中的にウーシンの地で著されたのはなぜであろうか。どのような背景があったのだろうか。その答えは本研究課題による研究では明らかにすることができなかったが、本稿のまとめの部分で一つの推測を提示するつもりである。

筆者は、未解決のふたつ課題のうちの後者に強い関心を持っているが、現有の資料からではこれ以上の探究は難しい。引き続き関心を維持しつつ、資料の探求を続けたい。

3. 七世パンチェンの儀軌書の受容とその変容の過程

七世パンチェン作の儀軌書の受容についてホルチャビリグは、「19世紀初頭、七世パンチン (=パンチェン-井上) =エルデニのつくった《チンギス=ハーン尊い三人の眷属の祭祀》は仏教の大ラマたちがモンゴル人の間にチンギス=ハーンをはじめとする先祖の祭祀がその地を占めることを警戒し、影響力のある信仰の対象を自らの宗教に取り入れようとした将来的計画の一つであった」と述べている⁵⁷。つまり、チベット仏教側がモンゴルの偉人を仏教のパンテオンの中に取り込もうとした行為であると結論しているといえる。たしかに、BJの伝える儀軌書ならびに図像制作の過程を見ると、一方的に七世パンチェンがモンゴルの歴史的偉人を仏教の中に取り込もうとしたともいえるのだが、もう少し細かくその経緯を追い、モンゴル側つまりトトイの側の考え方を把握することで、この外来文化の要素の受容に働いた力学が明確になるように思われる。

(1) チンギス祭祀についてたずねたのは誰か？

筆者は、2005年8月にフヘホトで開かれた中国蒙古学国際学術討論会での発表後、主催者側に求められて提出した一文(未刊行)“*bilig-ün jula kemegdekü erdeni-yin tobciy-a-noos Чингисийн тайлга болон Саган сэцний тайлгын өөрчлөл шинэчлэлийг таамаглах нь*”(『『智慧の灯火と言われる宝の綱要』からチンギスの祭祀とサガン=セチェンの祭祀の変化と刷新を推測すること』)というBJの初歩的な研究成果をまとめた。この未刊行の文章において、上の1の(6)の2)で扱った事柄に関し、トトイにチンギス祭祀のことをたずねた人物はサジャ=バンチンであると書いたが、その後、本格的にBJの記述を分析した結果、この人物はサジャ=バンチンではなく、ホルチャビリグが述べるように七世パンチェンとみなすほうが整合性があると判断するに至った。以下は、このような筆者自身の見解の修正を踏まえての論述である。

(2) トトイらの考え：儀軌書のコロフォンから

上の1の(6)の2)で述べたように、トトイら一行は、七世パンチェンにチベット語の手紙を書いて儀軌書の著述を依頼し、それを受けた七世パンチェンが儀軌書を書いたのであった。

このきっかけとなったのは、七世パンチェンがチンギス祭祀についてたずね、護法尊チンギスを祀っていることを賞賛し、あわせてトトイの家系を清浄であると述べたことであった。これをうけてトトイは、「主チンギスが護法尊であり衆生を護り慈しむ行いが大いにあると仰ったことを考えるに、まさにその聖なる主チンギスを満足させチンギスに懺悔

する儀礼を詳しく作るのがよい」と述べた。これをうけてウーシン出身で当時チベットにあった二人の僧も「今や主チングスの行いが広まる時になったに相違ないので、そのようなものを作るのは非常によい」といった。こうしてトトイらは七世パンチェンにチベット語で手紙を書いたのだった。

BJ に記されたところでは、トトイらの発言にはチングスのことしか現れておらず、ホトクタイとサガンをチングスと同時に祀る儀軌を作る必要性を感じていなかったようである。しかし、七世パンチェン作の儀軌書を見ると、トトイらがチングス、ホトクタイ、サガンの三人を祀るための儀軌を作るよう求めたことが明記されている。

七世パンチェン作の儀軌書のチベット語原文は、確認できた範囲では、タシルンボ版七世パンチェン全集 ja 巻 *yul lha gzhi bdag sogs kyi mchod 'phrin gyi rim pa rnams phyogs gcig tu bsdebs pa* の 15b1-19a3 と、財団法人東洋文庫所蔵河口慧海将来チベット語蔵外文献（河口コレクション）Call No. 130, Ref. No. 1951 (1), Folios 1a1-40b3 所収 *yul lha gzhi bdag sogs kyi mchod 'phrin gyi rim pa rnams phyogs gcig tu bsdebs pa* の 15b1-19a3、そしてラグシャンブリンが収集したオルドスの写本⁵⁸がある。河口コレクション本は著しく黒変しているため読み取れない部分が多い。本稿では、タシルンボ版七世パンチェン全集本とラグシャンブリンが収集した写本、そして、内モンゴル社会科学院チョイジ教授提供になるモンゴル語訳『チングス＝ハーンの奏上と供物を捧げる行いを迅速に為すものというもの（以下 CB と略す）』を併用する。なお、すでに述べたように、ホルチャビリグが内モンゴル社会科学院に所蔵されるとして紹介した七世パンチェン作儀軌書のモンゴル語訳『チングス＝ハーンの現観論、招請、供犠、懺悔礼拝、賞賛、祈願などを揃え含めた堅い武器というもの』⁵⁹は、筆者が同院で調査をおこなった時には行方不明となっていたため、遺憾ながら本稿に用いることができなかつたことを重ねてお断りしておく。

次頁〈表5〉に儀軌書のチベット語原文と CB のコロフォンを対照して表示する。なお、（ ）はチベット語原文タシルンボ版の表記、[] はチベット語原文タシルンボ版にのみ見える綴りであることを示す。

下線で示したように、儀軌書ではトトイの方から、チングス、ホトクタイ、サガンを一緒にした儀軌書を求めたことが明記されている。これをどう解釈するかは見解次第であり、七世パンチェンが、モンゴル側が求めなかつたにもかかわらず、ホトクタイとサガンをチングスと一緒にした儀軌を作ったことを、モンゴル側からの求めによるものであると記してその事実を覆い隠そうとしたともとれる。しかし、コロフォンのテキストを見る限りでは、そのような深読みを許すにたる根拠は何もない。文字通り、トトイが求めたものと考えておくのが妥当である。

〈表5〉儀軌書コロフォンの対照

| | |
|--|--|
| or du(tu) su u shin pe(ba'i) ze'i(se'i) [shog] | tha'i ji thu sa lag che(chi) tho tos nas rang gi |
| ordus-un üüsin beyise-yin qosiyun-u | tusalayçi tayiçi totui ber. öberün |
| オールドスのウーシン=ベイセ旗の協理台吉トイが、自らの一族の | |
| rigs kyi srung ma jing ger(gir) rgyal po dang, de'i 'khor du | gtog(gtogs) pa'i sngon gyis |
| uy sakiyulsun činggis qayan kiged. tegün-ü nöbür-tür | qariyatu erten-ü |
| 守護神チンギス=ハーンとその従者に属するいにしへの祖先 | |
| mes po gzugs can snying po ho thog tha'i si chen hong(hung) tha'i ji dang, sa ghan er khe hong | |
| ebüge čoyčas-un jirtiken quturytai sečin qung tayiçi kiged. sayang erke | |
| チヨグチャス=ウン=ジルヘン=ホトクタイ=セチェン=ホンタイジとサガン=エルヘ | |
| si chen tha'i ji bcas kyi mngon rtogs, spyan 'dren, bskang bshags, bstod | |
| sečin qung tayiçi selte-yin ilyal onul jalaly_a qangyal namančilal maytayal | |
| =セチェン=ホンタイジと一緒にの現観、迎請、懺悔、賞賛、 | |
| bskul ba bcas cha tshang zhig dgos zhes bskul ba'i ngor, | |
| duradqal selte qubi büriddüşen nigen keregti kemen duraddüşan ildar_a | |
| 請願と一緒に部分を全くしたものが一つ必要であると述べた時に、 | |
| gshin rje'i gshed kyi rnal 'byor pa, shākya ['i] dge slong blo bzang dpal ldan bstan pa'i | |
| yamandaka-yin yogicari sagjiy_a-yin ayay_a tagimilg-a :: 【以下、テキストなし】 | |
| ヤマンタカの瑜伽行者釈迦の比丘。 ロサンペンデンテンペー | |
| nyi ma phyogs las rnam gyal dpal bzang pos [gzims chung bka' gdams pho brang du] sbyar ba'o. | |
| ニマチヨグレーナムギェーペルサンポが [住まいのカーダムバ宮で] 書いた。 | |

(チベット語オールドス写本 7a1-4、チベット語タシルンポ版 8b6-9a3、CB, 9a2-7)

(3) チベット風儀軌受容に至る相互関係

以上から、トイがチベット風儀軌をオールドスに持ち帰った経緯は次のようになる。

七世パンチェンがチンギス祭祀についてたずね、護法尊チンギスを祀っている事実を賞賛したこと、同じく七世パンチェンがトイの家系をたずね、ホトクタイとサガンを含む先祖をもつその家系を清浄であると賞賛した。その意を、トイとウーシン出身の僧たちが解釈し、その結果、今は、大護法尊であるチンギスが、衆生を護り慈しむ行いが広まる時になったに相違ないので、聖なる主チンギスを満足させチンギスに懺悔する詳しい儀礼を作ることを七世パンチェンに求めることとなったのである。

七世パンチェンの問いをどのように位置付けるかは解釈次第であるが、彼がオールドスにおける儀礼に一定の興味を有していたらしいことは、BJにうかがうことができる。

boyda qamuy-yi ayiladduyçi bančan erdeni lubsangbaldandanbinima-yin gegen-e uçaraju mörgün. mutur-un adis-du kürteged bančan boyda gegen tere eyin jarliy bolurun. [中

略] douradu ʕaʕar orun-u aʕui yosu ba. ʕam ayan-du yambar metü yabuʕsan unuly_a bey_e selte amur-iyar kürçü iregsen teregüten. olan ʕüil ʕarliʕ asaʕuly_a ayiladduʕsan-a. (BJ, No. 71, 37: 11–38: 08)

尊い一切智者バンチャン (=バンチェン-井上) =エルデニ・ロブサンバルダグダンビニマ (=ロサンペンデンテンペーニマ-井上) の御前にお目にかかって礼拝し、御手の祝福を頂いて、尊いバンチャン御前その方はこのようにおっしゃった。[中略] 下の地 (=モンゴルあるいはオルドス-井上) の大いなるしきたりと、旅程をどのように進んだか、乗り物と御身ともどもに安寧に到着したかなど、たくさんのお言葉、おたずねをなさったところ

上に引用した部分は、トトイらがタシルンポに到着した直後のことであり、七世パンチェンがトトイにチンギス祭祀のことをたずねる前のことである。ここで、七世パンチェンは、「下の地の大いなるしきたり」をトトイにたずねている。すでに2の2)に引用した、七世パンチェンがチンギス祭祀のことをたずねる部分でも「土地の偉大なしきたり (orun ʕaʕarun aʕui yosu)」(BJ, No. 75, 44: 11–12) をたずねている。よって、「下の地の大いなるしきたり」と「土地の偉大なしきたり」とは、オルドスにおける祖先(偉人)崇拝やその祭祀を含む表現であろうと考えてよからう。

したがって、七世パンチェンがチンギス祭祀について問い、「護法尊チンギス」を祀っていることを賞賛し、あわせてトトイの家系を清浄である賞賛したことは、トトイらに「護法尊チンギス」の祭祀に見合う、そして賞賛にあずかった清浄な先祖を合わせ祀ることを想起させる呼び水、あるいは示唆となったのではないかと考えられる。しかし、示唆はあくまで示唆であり、その内容を解釈し、儀軌作成を依頼することを決めたのはトトイらである。ここに、示唆という行為と、その解釈を経ての受容決定という、与え手と受け手双方の相互関係があることを確認すれば、一連の過程がチベット側からの一方的な文化的攻勢であるかのような見解に達することはないだろう。

(4) 『ササ祭祀の経』にみえる「チンギス」の位置付け

ホルチャビリグの2005年の研究報告は、BJと、1906年に再編された現在の“二人の七チェンの祭祀”における重要な文献である『ササ祭祀の経 (*sasa tayily_a-yin sudur*)』の記述にもとづいて、チンギス祭祀は、七世パンチェン作の儀軌書がもたらされたために《チンギス=ハーン尊い三人の眷属の祭祀》となったが、チンギスに比して偉大さの点で劣るホトクタイとサガンがチンギスに比肩できなかったため、彼らをチンギスから分離して祀るという本来の形に復帰し、《チンギス=ハーン尊い三人の眷属の祭祀》はおこなわれなくなったと述べている⁶⁰。

しかし筆者は、ホルチャビリグの見解とはやや違う考えをもっている。すでに上に引用

したBJの記述(No. 89, 69: 13-70: 10)に見えていたように、たしかに、七世パンチェン作の儀軌書はトイの帰郷後、当時すでに営まれていたチンギスの祭祀を司るダルハド集団の頭領格であるバトジルガルとピリグンダライに与えられた。ここでチベット伝来の儀軌がモンゴル伝統の祭祀と接触したことになるが、これをバトジルガルとピリグンダライをはじめとするダルハド集団やその他のオルドス王侯がどう扱ったかは、手持ちの資料に確認できていない。このような現状にあつて筆者は、ホルチャビリグのいう《チンギス＝ハーン尊い三人の眷属の祭祀》の成立は現実視できないと考える。もっとも、現在執り行われているチンギス祭祀では、七世パンチェン作の儀軌書やチンギス、ホトクタイ、サガン三人を描いた図像が用いられていないことも事実である。このことから少なくともいえるのは、七世パンチェンが作ったチベット仏教式の儀軌は、現在に連なるチンギス祭祀には取り込まれなかったということである。

このように、七世パンチェン作の儀軌が現在のチンギス祭祀に取り込まれていない、あるいは排除されたという考えをもって『ササ祭祀の経』を分析し、取り出すことができるのは、チンギス祭祀の変遷ではなく、むしろ七世パンチェン作の儀軌の変容であることを以下に示そう。

1) 『ササ祭祀の経』のテキストについて

筆者が現在手にしている『ササ祭祀の経』は、チョイダルが提供した民国31年の最終紀年をもつ原本を活字に直して1987年に刊行されたテキスト⁶¹、ガルハタン＝プリンジルガルが光緒32年の最終紀年をもつ原本を活字に直して1992年に刊行したテキスト⁶²、ラグシャンブリンが収集し影印刊行した光緒32年の最終紀年をもつ写本⁶³、以上の三本である。おそらく、ラグシャンブリンが影印刊行した写本はガルハタン＝プリンジルガルが活字で刊行したテキストの原本であろう。

ホルチャビリグによると、『ササ祭祀の経』が光緒32年に新たに編まれた際、《チンギス＝ハーン尊い三人の眷属》を合祀することをやめて、主にホトクタイとサガンを一度にあるいは個別に祀ることとなった。このことは、民国31年に書かれた『ササ祭祀の経』の“尊いチヨグチャス＝ウン＝ジルヘン＝ホトクタイ＝セチェン＝ホン、サガン＝エルヘ＝セチェン＝ホン眷属と一緒に御在所ササという、普く集まった精美な安寧ある宝の宮殿(qotala čiyuluγsan tangsuy amuryulang-tu erdeni-yin qarsi)に”、“このような、普く集まった宝の宮殿(qotala čiyuluγsan erdeni-yin qarsi)に力ある菩薩、ソジリ＝テングリ(sujili tngri)、ホトクタイ＝セチェン＝ホン、サガン＝エルヘ眷属たちと一緒にあらしめて供物と祈願を捧げるしきたりをお作りくださったので”という記録より知ることができる」という⁶⁴。ホルチャビリグがこのように書いているということは、光緒32年本には見られない“尊いチヨグチャス＝ウン＝ジルヘン＝ホトクタイ＝セチェン＝ホン、サガン＝エルヘ＝セチェン＝ホン眷属と一緒に御在所ササという、普く集まった精美な安寧ある宝の宮殿

に”、“このような、普く集まった宝の宮殿に力ある菩薩、ソジリ＝テングリ、ホトクタイ＝セチェン＝ホン、サガン＝エルへ眷属たちを一緒にあらしめて供物と祈願を捧げるしきたりをお作りくださったので”という記述が民国31年本にはあるということを前提としているに相違ない。しかし、この下線を引いた記述は、筆者が用いている光緒32年本にも見えている。

筆者が用いているラグシャンプリン刊行になる光緒32年本とチョイダル提供活字版民国31年本を比較してみると、両者の間にはごく一部の語の綴りが異なるだけで、ホルチャビリグが指摘するような大きな差異は見られない。大きな差異として一箇所だけ、「中華民國の31年、冬の真ん中の月（＝11月－井上）の16日に書き終えた。良き功德よ、広まれ（dumdadu arad ulus-un yučin nigedüger on ebülün dumdadu sarayin arban jiruyarı-a bičijü tegüsbe. sayibuyandelgeren）」という記述が筆者が用いているラグシャンプリン刊行光緒32年本の末尾に付け加わっているだけである。

ホルチャビリグは自らが拠ったテキストが何処から出たものであるかを明らかにしていないため、あるいは筆者の手元にあるラグシャンプリン刊行光緒32年本とは異なる本を用いたのかも知れないが、この点の委細は全く不明である。以下の考察においては、『ササ祭祀の経』はラグシャンプリン刊行光緒32年本に依拠し、これを SS と略すこととする。

2) SS に見えるチンギスの書き換え

SS という史料は、その冒頭に、

boɣda čoyças-un jirüken qutuɣtai sečen qung. saɣang erke sečen qung nökiid selte-yin erkešil orušil sasa kemekü qotala čiyuluɣsan tangsuɣ amuɣulang-tu erdeni-yin qarsida tegüs jiryalang-un gegen bey_e-yin emün_e açılal daɣadqal ergüküi mörgüküi yosun-i darayalan jigteleküi anu: [後略] (SS, 01: 01-06)

尊いチヨグチャス＝ウン＝ジルヘン＝ホトクタイ＝セチェン＝ホン、サガン＝エルへ＝セチェン＝ホン眷属と一緒に御在所ササという、普く集まった精美な安寧ある宝の宮殿において、全き喜びの輝くお体の前で、報恩と祈願を捧げること、礼拝することのしきたりを順番に並べることは、[後略]

とあることから、ササといわれる普く集まった精美な安寧ある宝の宮殿でホトクタイとサガンを祀る手順を記したものであることがわかる。

上に引いた部分は、boɣda čoyças-un jirüken qutuɣtai sečen qung. saɣang erke sečen qung nökiid（尊いチヨグチャス＝ウン＝ジルヘン＝ホトクタイ＝セチェン＝ホン、サガン＝エルへ＝セチェン＝ホン眷属）とはじまっている。ここに、七世パンチェン作の儀軌や CB ではホトクタイの前に書かれているチンギスが言及されていないことから、一見したところでは、ホルチャビリグがいうように、チンギスが分離された結果として、このように書

かれることになったと考えてしまうこともやむを得ない。

しかし、SSの記述を細かく分析してみると、ホルチャビリグの《チンギス＝ハーン尊い三人の眷属》の合祀が停止したという説は、表現の上で正確さを欠くのではないかと思われる。まず、SSには、七世パンチェン作の儀軌がこの祭祀において機能していることを明確に示す記述があることを示そう。

blam_a nar gangsu ayiladqui-yi küliyemüi. (SS, 02: 04)

ラマたちがガンスをお読みになるのを待つ。

下線を引いた「ガンス (gangsü)」とは、七世パンチェン作の儀軌書のオールドス写本に見えるタイトル *jing ger rgyal po'i mngon rdogs bskang gsol dang bcas pa bsghugs so* の下線部にあたる語であり、七世パンチェン作の儀軌書を意味する⁶⁵。このことから、SSのいう「ガンス (gangsü)」からチンギスが除かれていなければ、上のホルチャビリグの説は成り立たなくなる。筆者が調査した三本の七世パンチェン作の儀軌のチベット語原文いずれにもチンギスは *jing gir(ger) rgyal po* と書かれている。よって、チンギスが一切書かれていない「ガンス (gangsü)」が発見されない限り、ホルチャビリグの説を妥当とすることは難しい。

SSには、祭祀における貴族たち (*noyad*) やタイジたち (*tayiji nar*) の作法を解説した部分があるが、その冒頭に次のような記述がある。

boɣda eɣen eɣige bodisung suɣjali tngri. qan eɣige sečin noyad-un gegen : ariɣulaqui-yin sayin ünüd ergün_e. (SS, 07: 02-03)

尊い主にして父なる菩薩ソジャリ＝テングリ、ハンにして父なるセチェン＝ノヤンたちの御前、清めの良き香りを捧げる。

この記述に見える「ハンにして父なるセチェン＝ノヤンたちの御前 (*qan eɣige sečin noyad-un gegen*)」はホトクタイとサガンをひとまとめにした表現であろう。では、その前にある、「尊い主にして父なる菩薩ソジャリ＝テングリ (*boɣda eɣen eɣige bodisung suɣjali tngri*)」は単なる神格としてのテングリのひとつを指しているのだろうか。筆者は、七世パンチェン作の儀軌やCBに見える、チンギス、ホトクタイ、サガンという常套的順列表現に鑑み、ホトクタイとサガンに先行して書かれている「尊い主にして父なる菩薩ソジャリ＝テングリ」はチンギスに対応しているのではないかと推測する。

ソジャリ (あるいはソジリ)＝テングリとは、ラグシャンプリンの説明によると、ホルモスタ (*qormusta*) つまり帝釈天であるという⁶⁶。ET/Urg (40r) には、「主 (=チンギス-井上) は、諸天の王である帝釈天に変化するとき (*eɣen tengris-ün qan qormusta bolun qubilqui-a*)」という記述がある。たいていのモンゴル語文献では、チンギスは帝釈天の息子であるとか帝釈天の命を受けてこの世に現れた者であると言われるが⁶⁷、筆者は、オル

ドスで書かれた年代記 ET に、チンギスを帝釈天の化身とする見方があったことを重視したい。また、帝釈天に化身できるとされているチンギスは、菩薩と等しい性格をもっていることも読み取れる。よって、ラグシャンプリンの説明が正しいとするならば、菩薩ソジャリ＝テングリとはチンギスを言い換えた表現である可能性を認めることができよう。

この、「尊い主にして父なる菩薩ソジャリ＝テングリ、ハンにして父なるセチェン＝ノヤンたちの御前」によく似た表現は、祭祀における一般民 (qaračus) の作法の解説の冒頭にも、

boyda ežen bodisung sujali tngri. yeke nom-un qayan sečin noyad-un gegen :: (SS, 08:05)

尊い主である菩薩ソジャリ＝テングリ、大いなる法王セチェン＝ノヤンたちの御前

とある。このことから、筆者は、チンギスは何らかの理由で SS では「菩薩ソジャリ＝テングリ」に書き換えられたものとする。

このチンギスの書き換えは、当該祭祀が、四世パンチェン賜与の聖物と七世パンチェン作の儀軌書によって発展し、執筆当時の祭祀の状態に至ったことを示す SS の記述からも裏付けられる。四世パンチェン賜与の聖物とは、ホトクタイの侍僧オチル＝トマイの孫ライジャルサン＝バンディダがチベットを巡礼し、四世パンチェンに礼拝した際に与えられた贈り物のことである。このことは、GT にも BJ にも記録がある (GT & BT, No. 51)。記述が長いので適宜中略して一連の流れを示しておく。< > はその前出の語の誤りを正した綴りである。

bančan boyda qamuγ-yi ayiladduγči abural itegel lubsang čoyiǰalsan<čoyiǰiǰalsan>-u gegen ba bandida lüi ǰalsan. lhi ǰalsan nar-ača ülemǰide eǰelegdeǰü :: teden-ü bariγči čidayči-yin ene kü šasin-u orušil :: punsuγgadančoyiling kemekü soyurqal-un ner_e-tü keyid bui bolǰu egün-dür tere kü :: degedü abural itegel bančan sumadi :: darma dovaza-yin gegen bey_e-yin adis-tu šitügen ba :: [中略] ede idam nom-un saliyulud<sakiyulsun> ču bui-yin deger_e. basa nemeǰü bančan boyda qamuγ-yi ayiladduγči :: lubsangbalan dambinim_a-yin gegen ber [中略] man-dur qubi barildulγ_a-tu kemen erketü :: boyda činggis ežen nököd selte γurbaγula ba. [中略] selte-yin öber öber-ün egüskeküi ǰang üiles :: ile onul-un takily_a bsang dayadqal-ud-i ǰokiyaju qayiralaysan boluyad :: odu-a basakü emün_e-yin ene metü qotala čiyuluγsan erdeni-yin qaršida :: erketü bodisung sujali tngri qutuγtai sečen qung :: sayang erke nököd selte-yi erkešigülǰü :: takil dayadqal ergükü-yin ǰang üiles-yi ǰokiyān qayiralaysan-u tulada :: [後略] (SS, 10:07-15:02)

聖パンチャン (=パンチェン-井上) 一切智者にして帰依処であるロブサン＝チョイ

ジャルサン（ロサンチョーキギエンツェン＝四世パンチェン－井上）の御前とバンディダ・ルイジャルサン、リ＝ジャルサン（ライジャルサン－井上）たちより殊勝に統べられて、彼らの能仁の宗教の在所であるプンスグガダンチョイリンという賜名もつ寺ができ、これにおいて、そのような尊い帰依処バンチャン・スマディ＝ダルマ＝ドワザ（スマティダルマドワザ＝ロサンチョーキギエンツェン＝四世パンチェン－井上）の御前の加持ある信仰の依り所と〔中略〕これら本尊、護法尊もある上に、また加えて、聖バンチャン一切智者ロブサンバルダン＝ダムビニマ（ロサンペンデンテンペーニマ＝七世パンチェン－井上）の御前が〔中略〕われわれに因縁があるといつて、尊い聖チンギス主と眷属一緒の三人と〔中略〕一緒のおのおの増長のしきたり、現観の祭祀の献香・祈願を作ってください、今は、また、前の（南の？）このような、普く集まった宝の宮殿において、力ある菩薩ソジャリ＝テングリ、ホトクタイ＝セチェン＝ホン、サガン＝エルへ眷属ともどもをあらしめて、供犠・請願を捧げるしきたりを作ってくださいのため、〔後略〕

とあり、「しきたりを作ってくださいのため」の後を略した部分には、吉日を選んでおこなう祭祀において祈願する内容が細かく記されている。

この、普く集まった宝の宮殿における、力ある菩薩ソジャリ＝テングリ、ホトクタイ＝セチェン＝ホン、サガン＝エルへ眷属の祭祀に関する記述は 22:05 で終わる。続く 22:06 からは、「尊いチヨグチャス＝ウン＝ジルヘン＝ホトクタイ＝セチェン＝ホン、サガン＝エルへ＝セチェン＝ホン眷属と一緒の御在所ササという、普く集まった精美な安寧ある宝の宮殿において、全き喜びの輝くお体の前で (boγda čoyčas-un jirūken qutuγtai sečen qung. saγang erke sečen qung nōkūd selte-yin erkešil orušil sasa kemekü qotala čiyuluγsan tangsuγ amuyulang-tu erdeni-yin qarsida tegüs jirγalang-un gegen bey_e-yin emün_e)」、毎年二回の例大祭を、土地のタイジや官吏たち、聖俗みながそれぞれの信仰によって祀っていた決まりを記した档冊があることを記している (SS, 22:06–23:04)。この、「」でくくった部分は、SS 冒頭に見える記述として本項冒頭に引用したものと全く変わらない表現になっている。この後は、三年に一度の軍旗 (sülde) の祭祀とその年、そして祭祀の当番に当たるタイジらの名前を記して、全編が終了する。

問題は、SS の冒頭と末端に見える「尊いチヨグチャス＝ウン＝ジルヘン＝ホトクタイ＝セチェン＝ホン、サガン＝エルへ＝セチェン＝ホン眷属と一緒の御在所ササという、普く集まった精美な安寧ある宝の宮殿において、全き喜びの輝くお体の前で」おこなわれる祭祀と、中段に頻繁に見える「普く集まった宝の宮殿における、力ある菩薩ソジャリ＝テングリ、ホトクタイ＝セチェン＝ホン、サガン＝エルへ眷属の祭祀」の表現が異なっていることである。筆者の解釈では、前者に、「ササ」という「尊いチヨグチャス＝ウン＝ジルヘン＝ホトクタイ＝セチェン＝ホン、サガン＝エルへ＝セチェン＝ホン眷属と一緒の御

在所」であり、ホトクタイとサガンの「全き喜びの輝くお体」、つまりこの二人に関わる御神体が所在するところという限定が加わっていることが、表現の違いの理由であると考える。この二人の御神体は現に「ササ」に存在していても、チンギスを言い換えたと考えられる菩薩ソジャリ＝テングリの御神体は存在していない、言い換えれば、チンギスを書き換えたと考えられる菩薩ソジャリ＝テングリは、「ササ」の埒外の存在なのである。

たしかに「チンギス」は文字としては現れていないので、これを理由として、三人の祭祀がおこなわれなくなったとするホルチャビリグの見解は全くの誤りとまではいえない。しかしすでに見たように、SS には、チンギス、ホトクタイ、サガン三人に言及する「ガンス」こと七世パンチェン作の儀軌が祭祀の中で機能していることが明記されており、チンギスを書き換えたと思われる菩薩ソジャリ＝テングリが複数回用いられていることから、祭祀の体系の中からは排除されていないと考えるべきである。

3) チンギスを書き換えた理由

SS が、七世パンチェン作の儀軌とそのモンゴル語訳にはっきりと現れているチンギスを、菩薩ソジャリ＝テングリに書き換えたのは何故だろうか。筆者は、これを、チベットからもたらされた儀軌が、従来から存在したチンギス祭祀に包摂されなかったことに原因があると考え。トトイの将来した七世パンチェン作の儀軌は、チンギス祭祀を司るダルハドに預けられたものの、現在は、チンギス祭祀とは別の“二人のセチェンの祭祀”の中に伝えられているのである。

筆者は、ホルチャビリグと同様、広くモンゴル人に崇拜されるチンギスに比して、偉大さの点で劣る地方王族ホトクタイとサガンが、一つの儀軌体系の中に存在し得なかったという見解に基本的に賛同する⁶⁸。この三人を包摂し得ないため、すでに当時オルドスの地に存在した、チンギスを帝釈天の化身と見る考えに従い、チンギスを菩薩化した上で、帝釈天を意味するソジャリ＝テングリと書き換え、直接にチンギスを表現しない方法によって、チベットの偉大な活仏パンチェンが自ら制作した儀軌をウーシンの地に定着させたと筆者は考える。

すでに上に述べたように、ウーシンという地は、ホトクタイの侍僧オチル＝トマイの孫が四世パンチェンから贈られたいくつかの聖物を祀っているところである。つまりパンチェンはウーシンの地では特別な存在であったのである。このことは、すでに見たように、ホトクタイの侍僧の孫が四世パンチェンより贈られた聖物と、七世パンチェン作の儀軌によって、力ある菩薩ソジャリ＝テングリ、ホトクタイ＝セチェン＝ホン、サガン＝エルへ眷属ともどもを、「普く集まった宝の宮殿」にあらしめて、供犠・請願を捧げるしきたりが成ったという過程を SS が明記していることから理解できる。

チンギスの伝統的な偉大さとパンチェンの宗教的な偉大さの間で、七世パンチェン作の儀軌は、モンゴルの既存の伝統的価値観に抵触せず、そして権威ある活仏パンチェン作に

なる仏教的儀軌体系を破壊しない方向に変容したのである。

(5) 七世パンチェン作の儀軌の将来過程と変容過程：文化触変論的総括

ここまで、七世パンチェン作の儀軌をトイがオルドスに持ち来たり、それが、おそらくはモンゴルの伝統的チンギス観に抵触するためにチンギス祭祀に包摂されることなく、チンギスを帝釈天の化身を意味する語に書き換えることで、モンゴル・チベット双方の価値体系の上に成り立つ個別の祭祀となった過程を見てきた。締めくくりとして、これを文化触変論的に整理し総括しておくこととする。

ここで考察の枠組みとするのは、平野健一郎が提示している文化触変過程のモデルである。平野は、ロバート＝レッドフォード、ラルフ＝リントン、メルビル＝ハースコピッツの“Memorandum for the Study of Acculturation” (*American Anthropologist*, 38, 1936) の論点を整理し、文化触変の過程を受け手の文化の側から見て、①文化要素の呈示と選択：外来の文化要素が示され、そしてそれを運ぶ；②統合：受け入れる文化要素を文化の体系の中に取り込んで、その一部にしていく；③結果：この過程の結果として受け手の文化にどのような状態がもたらされるか、という三段階の考え方を基本的な骨組みとして、文化触変過程の一般的なモデルを描いている⁶⁹。このモデルを意識しながら、以下の考察を進める。

1) 外来文化の新要素の受容と伝播

上に述べてきた一連の過程は、トイの属するモンゴル側がすでにチベット仏教の信仰を受け入れたという文化的な状態のもとで発生した。この状態において、民族の域を超えた超域的な共通の宗教とその共通言語としてのチベット語、その上を行き交う巡礼文化の存在が、安定した地盤とその上に敷かれたレールを準備し、この地盤とレールの上を移動する文化運搬者としてトイ一行ら巡礼者たちが機能したことを前提としている。

巡礼者は、宗教を同じくする超域的な文化の共通基盤の存在のもと、自己の宗教的实践の一環として神聖な地に赴いて、宗教者あるいは信者としての信仰と行為をより高い次元に引き上げることを目指す。この意味においては、トイらが当初目指したのは、純粋な意味での外来の異文化ではなく、すでにモンゴルに定着していた外来文化が規定する宗教的实践であった。ここで扱ったトイの事例は、その実践の過程で起こった外来文化の新要素の受容の過程である。モンゴル人がいつから仏教を受容したかわからない。たしかにモンゴル帝国時代の一部王侯が仏教に接しそれを信仰していたという記録が数多くある。しかしそれは、単に記録に残っていると言うだけのことで、モンゴル人の仏教受容の開始を証明したわけではない。実際のところ、騎馬遊牧民として高い移動性をもっているモンゴル人の場合、外来文化の伝播と受容を歴史的にたどってその起源が証明できることは極めて少ない。いつの間にか伝播・受容・定着した外来文化が他の民族や地域との間の共通

的基盤となって以降の文化交流の展開が記録に残っているため、これを研究の出発点としているというのが実情である。よって、本報告で扱った外来文化の受容とは、「すでに受け手側に定着した文化の中に存在していない新たな要素の受容」であると考えなければならない。このことを了解した上で、以下の考察を展開する。

本稿で扱った事例では、トトイはまず、七世パンチェンによるチンギス祭祀と祖先についての質問、チンギス祭祀への賞賛、護法尊チンギスの行いの偉大さとホトクタイとサガンを含む自己の家系の清浄さの指摘という提起・示唆、平野の言う「文化要素の呈示」に近い行為を受けている。七世パンチェンは、護法神供養儀軌のことを直接に呈示しておらず、チンギスが偉大な護法神でありそれを祀るのはよいことであると言い、さらにトトイの家系を清浄であると発言するとどまっているので、文字通りの「呈示」とは言い切れず、示唆という程度の行為であったと見ておくことにしよう。このように、与え手側が何かを直接的に呈示するのではなく、そのヒントとなるようなことを発言して受け手側に「提起・示唆」した事例がトトイの巡礼をさかのぼること200年以上前の歴史史料にも確認される。この事例は下で取り上げる。この「提起」あるいは「示唆」は、モンゴルにおけるチベット仏教やその新要素の受容に作用する要素として見逃すことのできない行為である。

この提起・示唆を受け、トトイ一行らがその提起・示唆の意味するところを語り合って解釈をおこない、元来のチンギス祭祀に護法尊供養祭祀の要素を入れることと、清浄であると認定された自分の二人の先祖を合祀することに相応の必要性を見出してこれを選択し、七世パンチェンに儀軌書作成を依頼し、チベット語で書かれた儀軌書を受容した。チベット側からの仏教的見地からの示唆が、モンゴル側の解釈というフィルターを通り抜けてその受容が選択・決定され、チベット側によって仏教的に系統立てられた儀礼となってモンゴルに将来されたという過程をここに見出すことができる。与え手のチベット側からの示唆と、それを受け手のモンゴル側が必要なものと解釈・認識するフィルターを通して選択し受容に至るといふ二つの力学がなければ、この事例に見える過程は成り立たない。

文化運搬者の動きは双方向的である。トトイの場合は受け手の側から与え手の側へという動きを示した。これと反対の動きを示すのは布教僧である。モンゴルを目指したチベットの布教僧の動きとそれへのモンゴル人の反応は、16世紀末のトゥメド＝モンゴルの大王侯にしてホトクタイの大叔父にあたるアルタンの仏教への接近過程に見えている。この歴史的経過は拙稿で明らかにした⁷⁰。以下、拙稿での論述を踏まえて、アルタンにおける外来文化の新要素受容過程を分析してみる。

アルタンのチベット仏教との接触は1558年の現在の甘肅地方への遠征のときに起こった。当時この一帯には漢人、ムスリム以外にも、モンゴル帝国時代に北方から移り住み、中央アジアやチベットから伝来した仏教を信仰するウイグル化したモンゴル人がいた。アルタンとホトクタイは数度にわたって甘肅地方に遠征を試みており、この地のウイグル化したモンゴル人はもちろん、そこに存在する仏教信仰に接し得た状況にあった。アルタンの仏

教との初めての接触はそうした仏教信仰圏への遠征の一コマであった。アルタンが信者としての行為を積極的に展開させたのは1570年代初頭のことである。この時すでにアルタンのもとには数人の仏教僧がいたことがわかっているので、アルタン自身が仏教信仰をかなり高めていたことは間違いない。そのころ、1571年、チベット仏教ゲルク派の高僧ソナムギャンツォ⁷¹が派遣したアシンラマという布教僧がアルタンをたずねた。アルタンの伝記である『アルタン=ハーン伝』⁷²によると、アシンラマはアルタンに対して、今生において仏の教えを広め、僧侶の集団を整え、福德と智慧を積むならば転輪聖王のようになり、今生の終わりに至る仏の位に至る、と説いた。翌1572年には、ダライラマに会い大蔵経をモンゴルの地に勧請してくれば、仏教が大いに広まり転輪聖王のように名を馳せて、仏の位を得て極楽浄土に生まれるだろう、とも説いた⁷³。これをきっかけにしてアルタンは1578年に青海地方にいたってダライラマに会った。モンゴルの地にチベット仏教が爆発的な拡がりを見せるのは、このアルタンとダライラマの会見以降のことである。

この一連の過程は、文化運搬者が巡礼者か布教僧かという違いがあるが、すでにモンゴルの地にあった仏教信仰を超域的共通基盤とし、その上を移動する布教僧による文化運搬行為を前提に、仏の教えを広めることで転輪聖王⁷⁴のようになり極楽浄土に生まれるということなどをアシンラマが提示・示唆した。この説法による提示・示唆を、仏教徒にして世俗的な支配者であったアルタンが解釈し、転輪聖王のようになり極楽浄土に生まれることに新たな獲得の必要性を感じ、巡礼者と同様に聖なる地に赴いてダライラマと会い、文化運搬者となってその後のモンゴルの地における仏教伝播に道を開いた。ここにも、外来文化の新要素伝播に至る前段の、提示・示唆→解釈→必要性の認識→選択という過程が見えている。当時すでにモンゴルに定着していた外来文化である仏教の新たな要素の伝播には、文化運搬者の移動性を保証する仕組み(巡礼、布教)をもつ超域的な文化基盤が重要な役割を担ったことを指摘できる。また、文化的与え手側の働きかけともいえる提示・示唆と、文化運搬者がそれを解釈し受容の必要性を認める行為が、文化の新要素の伝播に先立つ重要な過程として存在することも明らかである。

文化運搬者が移動する範囲が文化的共通基盤の上にあるということは、文化運搬者が受容し伝播を試みる文化の新要素の出発点と到達点との間に存在する中間点にも、その新要素が伝播する可能性を提供する。ネベスキー=ヴォイコヴィツが1950年代前半におこなった調査によると、青海地方のチベット人とモンゴル人が七世パンチェン作の儀軌にもとづいてチンギスを祀っているという⁷⁵。筆者自身は青海地方での調査をおこなっていないので、その事実を確認してはいないが、チベットとオールドスの中間に位置する青海地方で仏教を信仰するチベット人とモンゴル人が、七世パンチェン作の儀軌を受容していたとしても不思議ではない。超域的文化の共通基盤の上に展開される文化交流のもうひとつのあり方を示したものであるといえよう。

2) 外来文化の新要素に対する抵抗とその再解釈・再構成

トトイがもたらした七世パンチェン作の儀軌はチンギス祭祀を司るダルハド集団の頭領格に与えられたが、それはチンギス祭祀に包摂される形で受容されるまでには至らなかった。チンギス祭祀に包摂されなかった理由は不明であるが、ここに、従来より存在する伝統的チンギス祭祀に拠るダルハド側を代表とするモンゴル側の「抵抗」があったと見ることは不可能ではない。しかし、トトイがもたらした儀軌は、ウーシンの地に深い関係を持つ偉大な活仏パンチェンの作になる。これをすべて廃することは仏教的価値観から許されない。この伝統的価値観と宗教的価値観との不整合は、七世パンチェン作の儀軌に見えるチンギスを別の形に書き換えることによって別の祭祀となることで解決されたらしいことがSSの分析から判明した。この過程は、受け手側の「抵抗」を経て、受け手側が外来文化の新要素のうちのチンギスを、すでにオルドスに存在した帝釈天の化身と見る考え方によって再解釈し、チンギス、ホトクタイ、サガンという実在の偉人三人の構成を、菩薩テングリと二人の実在の偉人に再構成したことを示している。

その一方、パンチェン作の儀軌はモンゴル語に訳されて現存し、SSによる限りでは僧侶によるチベット語原文の朗読が祭祀儀礼を構成する要素として受容されていることが判明した。この受容は、パンチェン作の儀軌が、祭祀の構造に関わらないところで、つまり、チベット仏教の僧侶によって担われる祭祀の手順のひとつを構成する神聖な要素として受容されたということである。七世パンチェン作の儀軌は、すでにオルドスに伝えられて聖物化していた四世パンチェンからの贈り物と同様、聖物としての性格を持ち、そのテキストもまた神聖視されていたと思われる。儀軌のモンゴル語訳にしても、祭祀の構造に関わらない限りは廃されることなく神聖なものとして存在し得たと考えてよい。これもまた、元来は儀軌と一体であったテキストを、聖物として神聖視する再解釈が働いて分離、再構成し、受容を可能としたのである。

この過程は、いうまでもなく、文化の多様化が生み出される道程であって、文化の共通化に向かう過程ではない。しかし、北・中央ユーラシアのいくつかの民族を超えて確固として存在する仏教は依然として共通の超域的な文化的基盤であり続けている。多様化するはこの超域的基盤の上に存在する諸要素である。文化触変の過程がいかなる条件の下で可能であったのかを問うとき、そこに共通の超域的な基盤の存在を前提とする場合があることをトトイとアルタンの事例は示している。

4. おわりに

本稿の前半では、ホルチャビリグの研究を参考に、オーソドックスな文献学的手法でBJの研究をおこなった。BJの内容構成を示し、ホトクタイとその侍僧ならびに彼らの後裔の事績の記述からなる前半部と、トトイのチベット巡礼記からなる後半部に分けられることを述べた。前半部からは、ウーシン旗において、ETから続く歴史文献がホトクタイらの

伝記として解釈され、ホトクタイとサガンの崇拜対象化の進行とともに、この両者の伝記としての性格を強める再編集がおこなわれた過程を見ることができた。後半部では、両者の崇拜対象化の一つの表れである七世パンチェン作の儀軌の導入の事実関係を把握した。

後半では、BJとSSの記述を材料に、ウーシンにおける七世パンチェン作の儀軌の受容と変容過程を文化触変論を意識して分析、整理した。ここでは、超域的な文化の共通基盤の成立と、その上を運動する文化運搬者の移動性を保証する仕組みを前提とした文化運搬者による共通文化の新要素の伝播が、文化運搬者の移動先における新要素の提示・示唆を受け、文化運搬者自身がこれを解釈し、その必要性が認識されたものが選択され、文化運搬者によって受容される過程を経ていることを明らかにした。また、ある文化の共通基盤の上で展開される文化運搬者の運動は、終点あるいは帰着点としての送出側にばかりでなく、その中間点にも外来文化の新要素を伝播させる可能性があることを指摘した。そして、受け手での新要素への抵抗は既存の伝統的価値観との不整合がもたらす反面、新要素がもつ新たな価値が神聖性を帯びている場合には受容が起こる。ここでは新要素に対する再解釈によって、既存の伝統的価値観との整合をはかれる部分に変更が加わって再構成されて受容にいたり、不可侵の神聖性がみとめられた部分には変更が加わらずに受容される過程を明らかにした。そして最後に、文化触変過程を追求する際には、単なる「要素」の移動だけではなく、それを可能にした共通の超域的な基盤の存在を前提にすべき場合があることを述べた。

最後に再び文献の話に戻ろう。七世パンチェン作の儀軌は、チンギス祭祀に接触した結果、モンゴルの伝統的価値観と仏教の価値観いずれにも抵触しないよう表面的にはホトクタイとサガンの二人の祭祀のように見える形に変容した。1835年から翌年にかけて、チンギス祭祀に関係の深いSE、四世パンチェン由来の聖物をホトクタイとサガンの後裔が祀ることを述べるGT、そして七世パンチェン作の儀軌書受容の事実を述べるSEが相次いで著されたことに、七世パンチェン作儀軌書のオールドス到来は影響しているのであろうか。結局は、チンギス祭祀と“二人のセチェンの祭祀”は個別の祭祀となったが、三人の合祀を記した七世パンチェン作の儀軌の到来は、チンギス祭祀に一種の混乱をもたらしたともいえないだろうか。この混乱を整理する過程の中で、チンギスを祀る歴史的根拠を述べるSE、ホトクタイ家とその後裔の事績を明らかにしてパンチェンとの深い関係を証明するGT、そのホトクタイ裔の一員であるトイが七世パンチェンから三人合祀の儀軌書を受けた経過をのべるBJ、それぞれに儀軌書到来との関係が背景にあるように思われるのだが、これは今のところはまったく実証の域に達していない推測である。

注

- 1) ホトクタイ=セチェン=ホンタイジの事績については、井上『ホトクタイ=セチェン=ホンタイジの研究』参照。

- 2) 井上『『チャガン・テウケ』の2つの系統』、同『『ツァガン・トゥーフ』の写本評価について』、森川『モンゴル年代記』 pp. 91-111。
- 3) ウーシンを代表する文化人の名医ラグシャンプリンもその一人である。Layšanbürin, *Sayang sečen-ü tayily_a*, pp. 22-26, 60-78.
- 4) Čirmayiltu, *Qutuγtai · Sayang — sečen-ü ongγun tayily_a*.
- 5) 2004年、サガン=セチェン生誕400周年を記念して刊行された記念文集 *Sayang sečen-ü mendüleksen 400 jil-ün oi-yi durasqaqu ügüel-ün tegübüri* や *Öbür mongγul-un neyigem-ün sinjilekü uqayan* 誌の2004年5号、pp. 22-77 に組まれた記念特集には、ホトクタイやサガンの事績を讃える地元オルドスの研究者が執筆した文章が多く載せられている。
- 6) Čirmayiltu, *Qutuγtai · Sayang — sečen-ü ongγun tayily_a*.
- 7) Layšanbürin, *Sayang sečen-ü tayily_a*.
- 8) 内モンゴルから出された書物には、これを『サガン=エルヘ=セチェン=ホントイジの祭祀の奏上 (*sayang erke sečen qung tayiγi-yin tayily_a-yin öčig*)』と名付けているものがある。例えば、*Ordus-un tayily_a takily_a irügel maytaγal*, pp. 176-180、Layšanbürin, *Sayang sečen-ü tayily_a*, B16。
- 9) Mostaert, “Note sur Khutuktai setsen khung taidzi, bisaieul de Sanang setsen.”
- 10) Mostaert, “Sur le culte de Sayang sečen et de son bisaieul Qutuγtai sečen chez les Ordos.”
- 11) öčig。本報告ではこれを「奏上」と訳す。
- 12) サガンのこと。
- 13) ホトクタイは三世ダライラマより、チベット語でスクチェンニンポ (*gzugs can snying po*)、これをモンゴル語に訳したチョグチャス=ウン=ジルヘン (*čoyčas-un jürüken*) という称号を贈られた。このことは、古代インドのマガダ国王ビンピサーラ (*Bimbisāra*) の訳であり、この称号を得たことでホトクタイはビンピサーラの化身であることを三世ダライラマが認めたことを意味する。
- 14) ホトクタイのこと。
- 15) Serruys, “A Prayer to Cinggis qan.”
- 16) Kürelbayatur, “Činggis qayan-u öčüg takil üiledküi yosun üiles türgen-e büttüγči kemeγdekü orusibai.”
- 17) Čoyidar, “Sasa tayily_a-yin sudur orusiba.”
- 18) Bürinjiryal, “«Sasa tayily_a-yin sudur orusiba» gekü nom-un tuqai tuγtam sinjilge.”
- 19) Bürinjiryal, “«Sasa tayily_a-yin sudur orusiba» gekü nom-un tuqai tuγtam sinjilge.”, pp. 113-116.
- 20) ウーシン旗長に直接奉仕するソム。オルドスの方言では“ハラー”と発音される。
- 21) ホトクタイかサガンか明らかでないがおそらくはサガンであろう。
- 22) 原文ではボンスクガンチョイリン (*bungsuygančoyiling*) となっているが、Layšanbürin, *Sayang sečen-ü tayily_a*, p. 102 に従い訂正した。
- 23) 上の②では *tegüs* となっている。
- 24) 「ガンス (*gangsü*)」とは、『チンギス=ハーンの奏上と供物を捧げる行いを迅速に為すものというもの』(*činggis qayan-u öčüg takil üiledküi üiles türgen-e büttüγči kemeγdekü orusibai*) のチベット語原文 *jing ger rgyal po'i mngon rdogs bskang gsol dang bcas pa bsghugs so* の下線部に

あたる。

- 25) *kiyay-un üilečin*. *kiyay* は「みやまぬかば」という植物。漢語では羊草、碱草。意味がよくわからないので直訳のままとした。
- 26) *er_e-yin yurban nayadum*.
- 27) *Layšanbürin, Sayang sečen-ü tayily_a*.
- 28) 井上(評)「ラグシャンプリン著『サガン=セチェンの祭祀』」。
- 29) *Qurčabayatur, Mongyul-un böge mörgül-ün tayily_a takily_a-yin soyul*, pp. 151-163, *Qasbiligtü, Galayutai nutuy-un tuulis*, vol.1, pp. 337-433, *Arbinbayar, Ordus mongyul tayily_a takily_a*, 167-179 など。
- 30) この BJ の写本は、現在内モンゴル社会科学院図書信息中心にただ一本が所蔵されている。毛頭紙に黒墨、毛筆書き、19×17 cm、34葉74面。この写本の筆跡をよく観察すると、かつて内モンゴル社会科学院に勤務していたセイノイロブ (*Seyinoyirub*) 氏のものであることがわかる。よってこの写本そのものは原本ではなく、かなり後代の写しである。
- 31) *Qurčabilig, “Sayang sečen-ü tuqai sudulul-du qolbuydaqu jarim sariu-yi yaryaqu ni.”*
- 32) *Qurčabilig, “Činggis qayan erkin yurban nöbür-ün takily_a-yin ekilel tegüskel.”*
- 33) ホルチャピリグが“*Činggis qayan erkin yurban nöbür-ün takily_a*”と書いたのを直訳して「チンギス=ハーン尊い三人の眷属の祭祀」としたが、正確には、「チンギス=ハーンとホトクタイ・サガンの尊い眷属との三人の祭祀」とするべきだろうか。
- 34) ウーシンでの初めての初歩的現地調査は2007年6月26日から29日におこなった。『サガン=セチェンの祭祀』の著者であるラグシャンプリン氏、ホトクタイ=セチェン=ホントイジの直系の子孫であるドルジノロブ氏、ウーシン旗民政局書記ガルデイ氏をはじめとする行政部門、ウーシンの著名な研究者エルヘセチェン氏、調査に同行頂いた内モンゴル社会科学院のチョイジ先生など多くの方のご協力のご教示を得たことをとくに記して謝意を表する。
- 35) *Qurčabilig, “Sayang sečen-ü tuqai sudulul-du qolbuydaqu jarim sariu-yi yaryaqu ni”*, pp. 44-45.
- 36) 井上「ホトクタイ=セチェン=ホントイジ伝 *gegen toli* の基礎的研究」において、内モンゴル社会科学院蔵の二つの GT の写本のうち、筆者が A 本と名付けた写本のテキストがよりすぐれているとした結果に基づき、ここでも A 本に依拠した。
- 37) *Qurčabilig, “Sayang sečen-ü tuqai sudulul-du qolbuydaqu jarim sariu-yi yaryaqu ni”*, pp. 45-49.
- 38) *Qurčabilig, “Sayang sečen-ü tuqai sudulul-du qolbuydaqu jarim sariu-yi yaryaqu ni”*, p. 45.
- 39) *Qurčabilig, “Sayang sečen-ü tuqai sudulul-du qolbuydaqu jarim sariu-yi yaryaqu ni”*, p. 45.
- 40) 井上「ホトクタイ=セチェン=ホントイジ伝 *gegen toli* の基礎的研究」。
- 41) 井上「ホトクタイ=セチェン=ホントイジ伝 *gegen toli* の基礎的研究」 p. 289.
- 42) *Qurčabilig, “Sayang sečen-ü tuqai sudulul-du qolbuydaqu jarim sariu-yi yaryaqu ni”*, pp. 45-49.
- 43) *Qasbiligtü, Galayutai nutuy-un tuulis*, vol. 1, pp. 373-381.
- 44) *Layšanbürin, Sayang sečen-ü tayily_a*, pp. 26-29, pp. 341-352.
- 45) 井上(評)「ラグシャンプリン著『サガン=セチェンの祭祀』」、p. 110.
- 46) ラグシャンプリンは「ムンゲン=テブシ (*mönggün tebsi*)」という地名も併記している。
Layšanbürin, Sayang sečen-ü tayily_a, p. 341.
- 47) 後出の「赤い主 (*ulayan ejen*)」のこと。

- 48) BJ ではシンザ (singza) と表記している。
- 49) Layšanbürin, *Sayang sečen-ü tayily_a*, p. 81.
- 50) SE, 33r, ll. 7-9. SE については、Heissig, “Marginalien zur Ordos-Chronik Subud Erike (1835).”, Yang, *Subud Erike*、楊海英『モンゴル草原の文人たち』 pp. 74-116 参照。
- 51) Qurčabilig, “Sayang sečen-ü tuqai sudulul-du qolbuɣdaqu ɟarim sariu-yi ɟarɣaɣu ni”, p. 45.
- 52) Qurčabilig, “Sayang sečen-ü tuqai sudulul-du qolbuɣdaqu ɟarim sariu-yi ɟarɣaɣu ni”, pp. 45-49.
- 53) 井上「ホトクタイ=セチェン=ホンタイジ伝 *gegen toli* の基礎的研究」 pp. 264-275、楊『モンゴル草原の文人たち』 pp. 113-114。
- 54) Heissig, “Marginalien zur Ordos-Chronik Subud Erike (1835).”, Yang, *Subud Erike*、楊『モンゴル草原の文人たち』 pp. 74-116。
- 55) Layšanbürin, *Sayang sečen-ü tayily_a*, pp. 26-29, B60-62。
- 56) Mostaert, “Sur le culte de Sayang sečen et de son bisaïeul Qutuɣtai sečen chez les Ordos.”、井上「ホトクタイ=セチェン=ホンタイジ伝 *gegen toli* の基礎的研究」 p. 266。
- 57) Qurčabilig, “Činggis qaɣan erkin ɣurban nöküür-ün takily_a-yin ekilel tegüskel.”, p. 251.
- 58) Layšanbürin, *Sayang sečen-ü tayily_a*, pp. 26-29, B17-21.
- 59) Qurčabilig, “Sayang sečen-ü tuqai sudulul-du qolbuɣdaqu ɟarim sariu-yi ɟarɣaɣu ni”, pp. 48-49.
- 60) Qurčabilig, “Činggis qaɣan erkin ɣurban nöküür-ün takily_a-yin ekilel tegüskel.”
- 61) Čoyidar (uul eke bičig-i qangɣaba). “Sasa tayily_a-yin sudur orusiba.”
- 62) Bürinɟiryal, “«Sasa tayily_a-yin sudur orusiba» gekü nom-un tuqai tuɣtam sinɟilge.”, pp. 116-119.
- 63) Layšanbürin, *Sayang sečen-ü tayily_a*, B1-14.
- 64) Qurčabilig, “Činggis qaɣan erkin ɣurban nöküür-ün takily_a-yin ekilel tegüskel.”, pp. 250-251.
- 65) Layšanbürin, *Sayang sečen-ü tayily_a*, p. 169, 注⑦。
- 66) Layšanbürin, *Sayang sečen-ü tayily_a*, p. 170, 注⑬。
- 67) Heissig, *The Religions of Mongolia*. pp. 59-69; Банзаров, “Чёрная вера, или шаманство у монголов”, pp. 32-36.
- 68) Qurčabilig, “Činggis qaɣan erkin ɣurban nöküür-ün takily_a-yin ekilel tegüskel.”, p. 251.
- 69) 平野『国際文化論』、p. 58 の図3 に端的に示されている。
- 70) 井上『ホトクタイ=セチェン=ホンタイジの研究』、pp. 312-338。
- 71) のちの青海地方での会見で、アルタンらから「ダライラマ」という称号を受ける。三世ダライラマである。
- 72) 吉田 (ほか共訳注) 『『アルタン=ハーン伝』訳注』 132-133節。
- 73) 吉田 (ほか共訳注) 『『アルタン=ハーン伝』訳注』 159-160節。
- 74) 古代インドの思想で理想的な王を指す概念。転輪聖王には金輪王、銀輪王、銅輪王、鉄輪王の四種類がある。鉄輪王は鉄の輪宝を持ち、地球上に四つあるとされる大陸のうち一つを支配する。銅輪王は銅の輪宝を持ち二つの大陸を、銀輪王は銀の輪宝を持ち三つの大陸を、金輪王は金の輪宝を持ち四つの大陸全てを支配する。
- 75) Nebesky-Wojkowitz, *Oracles and Demons of Tibet : the Cult and Iconography of the Tibetan Protective Deities*. pp. 242-243.

史料

『明らかな鏡』[GT]. *gegen toli. Sumati daram_a qarti (sumatidharmakīrti)*. 内モンゴル社会科学院図書信息中心蔵。

『エルデニ=イン=トブチ』[ET], [ET/Urg]. *qad-un ündüsün-ü erdeni-yin tobči. Sayang sečen. Haenisch, Eine Urga-Handschrift des mongolischen Geschichtswerks von Secen Sagang (alias Sanang Secen)*.

『真珠の数珠』[SE]. *subud erike. Үндүсүн-үбчү. Heissig, Die Familien- und Kirchengeschichtesschreibung der Mongolen. Teil II., pp. 1-70* 所収。

『ササ祭祀の経』*Sasa tayily_a-yin sudur*. [SS].

光緒32年本影印：Layšanbürin. *Sayang sečen-ü tayily_a*, B1-14 所収。

光緒32年本活字テキスト：Bürinjiryal, “«Sasa tayilya-yin sudur orusiba» gekü nom-un tuqai tuγtam sinjilge.”, pp. 116-119 所収。

民国31年本活字テキスト：Čoyidar, “Sasa tayily_a-yin sudur orusiba.”

『チンギス=ハーンの奏上と供物を捧げる行いを迅速に為すものというもの』[CB]. *činggis qayan-u öcüg takil üiledküi üiles türgen-e büttüçči kemegdekü orusibai*.

Lubsangbaldandambinimačoylayimjalbalzangbo. 内モンゴル社会科学院チヨイジ教授蔵。

『ジンギル王の現観と酬補の儀軌というもの』*jing gir rgyal po'i mngon rtogs bskang gsol dang bcas ba bzhugs so. paṇ chen bzhi pa bstan pa'i nyi ma*.

タシルンポ版：*yul lha gzhi bdag sogs kyi mchod 'phrin gyi rim pa rnam phyogs gcig tu bsdebs pa. gsung 'bum. bstan pa'i nyi ma TBRC W6205, 1795-1803, 9 Vols. ja, 15b1-19a3*.

東洋文庫河口コレクション版：*yul lha gzhi bdag sogs kyi mchod 'phrin gyi rim pa rnam phyogs gcig tu bsdebs pa. Call No. 130, Ref. No. 1951 (1), Folios 1a1-40b3. ja, 15b1-19a3*.

オールドス写本：Layšanbürin. *Sayang sečen-ü tayily_a*, pp. 26-29, B17-21.

『ハンたちノヤンたちの根源を簡単にまとめて述べた智慧の灯火』。*qad noyad-un ündüsüle-i tobčilan quriya ju üjügülügsen bilig-ün jula*. Lubsanglhündüb. 内モンゴル社会科学院図書信息中心蔵。

参考文献

Arbinbayar, Narasun, Sa. *Ordus mongγul tayily_a takily_a*. Qayilar : Öbür mongγul-un soyul-un keblel-ün qoriy_a, 2005.

Bürinjiryal, Farqatan. “«Sasa tayilya-yin sudur orusiba» gekü nom-un tuqai tuγtam sinjilge.” *Öbür mongγul-un neyigem-ün sinjilekü uqayan*, 1992-3 : 111-122.

Čirmayiltu, B., Gerelčeečeg. *Qutuγtai · sayang — sečen-ü onγyun tayily_a*. Kökeqota : Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy_a, 1999.

Čoyidar (uul eke bičig-i qangγaba). “Sasa tayily_a-yin sudur orusiba.” *Ordus-un soyul-un öb soyul*. [Dongsheng] : [Yeke juu ayimaγ-un udq_a uraliy-un qolbuγ_a-yin «altan γandari» nayirayulqu keltes, arad-un uran jökijal-i sudulqu qural], [1987] : 191-198.

Kürelbayatur. “Činggis qayan-u öcüg takil üiledküi yosun üiles türgen-e büttüçči kemegdekü

- orusibai.” *Ordus-un soyul-un öb soyul*. [Dongsheng] : [Yeke juu ayimay-un udq_a uraliy-un qolbuγ_a-yin «altan γandari» nayirayulqu keltes, arad-un uran jokiyal-i sudulqu qural], [1987]: 182–190.
- Layšanbüürin. *Sayang sečen-ü tayily_a*. Kökeqota : Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy_a, 2004.
- Ordus-un tayily_a takily_a irügel maytayal*. Kökeqota : Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy_a, 1991.
- Qasbiligtü, Č., Davaǰamsu, Bo. *Galayū-tai nutuy-un tuulis*. 2 vols. Kökeqota : Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy_a, 1995.
- Qurčabayatur, L., Üjüm_e, Č. *Mongγul-un böge mörgül-ün tayily_a takily_a-yin soyul*. Qayilar : Öbür mongγul-un soyul-un keblel-ün qoriy_a, 1991.
- Qurčabilig, N. “Sayang sečen-ü tuqai sudulul-du qolbuγdaqu ǰarim sariu-yi γaryaqū ni — «bilig-ün ǰula kemegdekü erdeni-yin tobčiy_a»-yi ungsiyad.” *Öbür mongγul-un neyigem-ün sinǰilekü uqayan*, 2004–5: 44–49.
- Qurčabilig, N. “Činggis qayan erkin ǰurban nöktür-ün takily_a-yin ekilel tegüskel.” *Dumdadu ulus-un mongγul sudulul-un olan ulus-un erdem sinǰilegen-ü yarilčaqu qural : ügüel-ün tobči*. Kökeqota, 2005 : 249–251.
- Sayang sečen-ü mendülegesen 400 ǰil-ün oi-yi durasqaqu ügüel-ün tegübüri*. Kökeqota : Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy_a, 2004.
- Haenisch, Erich. *Eine Urga-Handschrift des mongolischen Geschichtswerks von Secen Sagang (alias Sanang Secen)*. Deutsche Akademie der Wissenschaften zu Berlin Institut für Orientforschung Veröffentlichung Nr 25. Berlin : Akademie-Verlag, 1955.
- Heissig, Walther. “Marginalien zur Ordos-Chronik Subud Erike (1835).” *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 100 (1950): 600–617.
- Heissig, Walther. *Die Familien- und Kirchengeschichtsschreibung der Mongolen*. Teil II. Asiatische Forschungen. 16. Wiesbaden : Otto Harrassowitz, 1965.
- Heissig, Walther. *The Religions of Mongolia*. Translated from the German edition by Geoffrey Samuel. London : Routledge and Kegan Paul, 2000 (orig. 1980).
- Mostaert, Antoine. “Note sur Khutuktai setsen khung taidzi, bisaïeul de Sanang setsen.” in: “Ordosica”. Reprint from *Bulletin No. 9 of the Catholic University of Peking*(1934) : 56–62.
- Mostaert, Antoine. “Sur le culte de Sayang sečen et de son bisaïeul Qutuγtai sečen chez les Ordos.” *Harvard Journal of Asiatic Studies* 20(1957): 534–566.
- Serruys, Henry. “A Prayer to Cinggis qan.” *Études mongoles et sibériennes*, 16(1985): 17–36.
- Nebesky-Wojkowitz, René de. *Oracles and Demons of Tibet : The Cult and Iconography of the Tibetan Protective Deities*. Taipei : SMC Publishing INC, 1990. (orig. s’Gravenhage: Mouton, 1956.)
- Yang Haiying. *Subud Erike : A Mongolian Chronicle of 1835*. Cologne : International Society for the Study of Culture and Economy of the Ordos Mongols, 2003.
- Банзаров, Доржи. “Чёрная вера, или шаманство у монголов.” *Собрание сочинений*. Издание 2-е,

дополненное. Улан-Удэ : Изд-во БНЦ СО РАН, 1997: 32-36.

平野健一郎『国際文化論』東京大学出版会、2000。

井上治「『ツァガン・トゥーフ』の写本評価について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』哲学史学編別冊18(1991):71-83。

井上治「『チャガン・テウケ』の2つの系統」『東洋学報』73-3/4(1992):366-343。

井上治『ホトクタイ=セチェン=ホンタイジの研究』風間書房、2001。

井上治「ホトクタイ=セチェン=ホンタイジ伝 *gegen toli* の基礎的研究」『蒙古史研究』7(2004):257-291。

井上治(評)「ラグシャンプリン著『サガン=セチェンの祭祀』」『内陸アジア史研究』20(2005):107-114。

森川哲雄『モンゴル年代記』白帝社、2007。

楊海英『モンゴル草原の文人たち——手写本が語る民族誌』平凡社、2005。

吉田順一(ほか共訳注)『『アルタン=ハーン伝』訳注』風間書房、1998。



現在サガンの祭祀を行う *qotala čiyuluγsan tangsuγ amuγulang-tu erdeni-yin qarsi* (普く集まった精美な安寧ある宝の宮殿; 汇众圣熙宝殿) の前で。右より、ラグシャンプリン (『サガン=セチェンの祭祀』の著者)、ドルジンノロブ (サガン=セチェンの子孫)、チョイジ (内モンゴル社会科学院研究員)。



↑宝殿内の「赤い主 (ulaγan eγen)」中央部：忿怒相のチンギス



↑宝殿内の「赤い主 (ulaγan eγen)」下部：中央がホトクタイ、右がサガン。

(INOUE Osamu)

執筆 者 一 覧 (執筆順)

| | |
|-------|---|
| 栗林 均 | 東北大学東北アジア研究センター・教授 |
| 宇野 伸浩 | 広島修道大学人間環境学部・教授 |
| 柳澤 明 | 早稲田大学文学学術院・教授 |
| 藤代 節 | 神戸市看護大学・准教授 |
| 諏訪淳一郎 | 弘前大学国際交流センター・准教授 |
| 坂井 弘紀 | 和光大学表現学部・准教授 |
| 森平 雅彦 | 九州大学大学院人文科学研究院・准教授 |
| 石川 巖 | 財団法人東方研究会・研究員 |
| 藤井 麻湖 | 愛知淑徳大学現代社会学部・講師 |
| 井上 治 | 島根県立大学総合政策学部・教授 島根県立大学北東アジア地域研究センター・副センター長 |

北東アジア研究 別冊第1号

北・中央ユーラシアにおける異文化の波及と
相互接触による文化変容の歴史的研究

| | |
|-------|---|
| 発行日 | 2008年3月31日 |
| 編集・発行 | 島根県立大学 北東アジア地域研究センター (NEAR) 〒697-0016 島根県浜田市野原町2433-2 Tel : 0855-24-2200 http://www.u-shimane.ac.jp |
| 印刷所 | 柏村印刷株式会社 〒697-0034 島根県浜田市相生町3889 |

Shimane Journal of North East Asian Research

Special Issue Vol. 1

March 2008

Historical Study in Cultural Contacts and Changes of North/Central Eurasia

| | | |
|---------------------|--|-----|
| UNO Shigeaki | Foreword | 1 |
| INOUE Osamu | Preface | 3 |
| KURIBAYASHI Hitoshi | A Memorandum for the Usage of the Pentaglot Thesaurus of Qing Dynasty, in the 18th Century | 7 |
| UNO Nobuhiro | Exchange-Marriage as Seen in the Marriage Relationships of the Hülegü's Family | 27 |
| YANAGISAWA Akira | The Baryu People of Fengcheng 鳳城 and Xiuyan 岫巖, Liaoning Province | 47 |
| FUJISHIRO Setsu | On the Studies of the Turkic Languages in North East Asia: A Brief Survey of the Research Activities in Japan through the Pre- and Post-Soviet Times | 67 |
| SUWA Jun'ichiro | The Reification of Nature and Generation of Ethno-Cultural Capital in Post-Socialist Tuva: A Case Study of Khoomei | 85 |
| SAKAI Hiroki | On the Foreign Nations in the Oral Epics of Turkic Peoples in Central Eurasia | 109 |
| MORIHIRA Masahiko | On the Maintenance of the Goryeo Dynasty under the Domination of the Yuan Empire | 135 |
| ISHIKAWA Iwao | Ancient Bon Religion and Its Transformation in Ancient Tibet | 173 |
| FUJII Mako | The Trace of Qi-Chong (七冲) in the Heroic Epic "Jangar" | 187 |
| INOUE Osamu | The Process of Accepting Foreign Cultural Elements at Ordos Region from the 19th Century to the First Half of the 20th Century: A Case Study of "Worship of Qutuytai and Sayang Sečen" | 227 |

The University of Shimane
Institute for North East Asian Research

2433-2, Nobara-cho, Hamada-city, Shimane 697-0016, JAPAN

Tel : +81-855-24-2200

<http://www.u-shimane.ac.jp>

